

市整会30周年記念特別号

市
整

会

市

整

合

市整会30周年記念特別号（市整会会報No.29）

巻頭言	市整会会長 榎 本 高 明	3
祝辞	大阪市立大学大学院医学研究科教授 高 岡 邦 夫	4
市整会の歩み		
市整会総会、研修会、学術講演会、新年会	阪 本 邦 雄	5
市整会ゴルフコンペ	楯 憲一郎	8
市整会家族会	南 平 克 積	11
市整会会員と勤務医との交流ゴルフコンペと自由参加ツアー	頼 功	13
会員の声		
写真家として	有 馬 清 徳	20
彫塑	石 上 直	22
私の娯楽は絵画	近 藤 正 樹	23
ゴルフと私	頼 功	25
いつかみた夢	坂 本 和 彦	27
僕と唄	野 上 倫 昭	31
トロムソへの旅	伊 藤 成 幸	35
私の歩行研究	坂 本 和 英	39
航海記（船医として）	宮 内 貴	41
私の住む町	竹 村 永	43
当院整形外科創設期の思い出	沢 井 康 悦	46
「癌にして、がんにあらず」のがん保険	江 口 亨	48
『M』へ	中 村 英 健	50
誠に『男』は情けない	島 田 永 和	52
開業録（2年）	佐 藤 哲 也	54
開業後に興味をもったいくつかの事柄	茶之木 頼 彦	56
最近つくづく思うこと	古 瀬 洋 一	58
開業して1年	豊 川 英 樹	60
在宅医療への想い	畠 中 正 昭	62
今、目指している医療、介護、事業	平 田 宗 興	64
ケアマネ受験記	寺 川 文 彦	66
診療所における介護保険事業への取り組み	馬 野 隆 信	67
整形外科と在宅医療	荒 木 良 守	69
市整会の発展を願って	吉 中 正 好	71
市整会の資金協力依頼に携わって	小 松 堅 吾	72
市整会に望むこと	黒 田 晃 司	75
市整会30周年記念祝賀会		
市整会創立30周年記念パーティー	西 沢 徹	77
式次第 メニュー 写真		79
市整会30周年記念事業準備委員会	南 平 克 積	90
編集後記	前 野 岳 敏	92

市整会会報

大阪市立大学整形外科開業医会

No.29

2003年1月10日発行

30周年記念特別号

事務所：大東市扇町5-14

医）榎本整形外科内

☎072-874-1573 FAX072-874-1574



巻頭言

市整会会長

榎本高明

大阪市立大学整形外科開業医会（市整会）は、創立30周年を迎えることができました。おめでとうございます。

初代会長、伊藤成幸先生をはじめ、二代目松尾澄正先生、三代目吉中正好先生、四代目長田明先生の歴代会長を中心に、諸役員と、会員各位の御尽力のおかげで、市整会は、ますます活発に発展、充実してきました。会員数は180人を超え、市大整形外科同門会会員数の三分の一を占めています。

大学の同門会とは別の組織で、開業医会として、市整会のように活発に活動している会は全国でも少ないと聞いております。先輩方のおかげです。

私が会長に指名されてから2年余り経ちます。凡才で、話下手で、仕事らしい仕事は何もできていないので心苦しいかぎりですが、私の最も望むところであります。市整会の各世代の先生方の意識が市整会の方に向けられてきているのが強く感じられるようになってきました。市整会の研修会や色々の行事に、各世代の多くの会員の先生方が出席していただけるようになりました。非常にありがたいことと感謝しています。

現役員はすばらしい先生方ばかりで、夫々の持ち場で、十分に活躍していただいています。色々の市整会活動を活発に遂行するように、頑張ってください。それらの活動によって、定款に謳っている会員の協調、相互親睦、互助活動が少しずつ図られてきているかと、喜んでいます。

現在は、整形外科開業医にとって、経済的に非常に苦しい時代に入っています。井勘定では、やっていけないようになってきました。また、情報公開やインフォームド・コンセントなど、今までの大まかな診療ではやっていけない、やりにくい時代になっています。お互いに情報交換やアドバイスしあえる場をできるだけ多く作って、何とかうまく生き抜いていく術を模索していきたいものです。

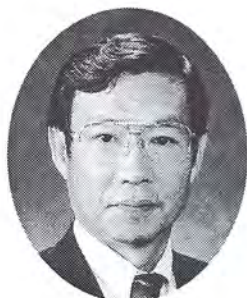
大学は高岡新教授を中心に張り切って頑張っておられるようです。大学と連携を深めながら、開業医会の立場で、できるだけ大学教室を援助、応援していきたいと考えています。

しかし、また、逆に大学の方から援助を仰がねばならないことがあります。人的支援の問題であります。私達開業医の心配事のひとつですが、もし、開業医自身が万一病気などになり、暫らく自分の診療所の仕事ができなくなった場合、診療所、病院を閉鎖しなくてもよいように、大学から少しでも人を送ってもらって、応援していただきたいことです。幸い、高岡教授も、教室の人も、応援してくれる意向ですので、その方のことも何回もお願いしておきたいと考えています。

他学に誇れる我々の市整会がますます活発になりますよう、会員諸兄の尚一層の御協力、御支援をお願いいたします。

そして、市整会は常に会員の皆様を応援している味方です、と言えるような、頼りがいのある会にしたいものです。

祝 辞



大阪市立大学大学院医学研究科
整形外科科学教授

高岡 邦夫

大阪市大整形外科開業医会（市整会）の発足30周年記念祝賀会にご招待を賜り心から感謝致しております。本会の発足の契機は有志の懇親、医学研修だけでなく、教養の向上、若い同門後輩の支援であったと聞きます。発足当時、会員はわずかであったようですが30周年を迎えた今日では会員数180名を超えるまでに発展しているとのこと、お祝いを申し上げます。会が趣旨に沿って健全に運営されてきた証ではないかと拝察し、日ごろからの当教室の若い医局員が物心両面の御支援を賜っていること深く御礼申し上げます。昨今の激しく変化する社会情勢の中で整形外科科学教室も教育、研究、診療のそれぞれの分野で様々な問題に直面しています。医学部学生教育のみならず卒後教育システムも大きく変化しようとしており、その対応に追われています。また文部科学省COEプログラムに見られるように研究の高度化と個性化、大学間のみならず国際的競争力の獲得が求められています。わが整形外科教室もそのような時代変化に対応すべく努力しなければなりません。幸いにも毎年、潜在力のある多くの若い医師たちが入局しており、日夜、診療と研究に励んでいます。その能力を最大限発揮できる機会と環境を整えることが私も含めた医局指導層の最も重要な任務であると考えています。ひたすら診療技術を高め、新しい研究に邁進し、互いに切磋琢磨することに努めなければなりません。同時に医師としての使命感と責任感を高める努力も必要です。この努力を続けてゆけば、必ず市大整形外科が先輩諸氏の期待に沿った大きな発展ができるに違いないと確信しています。折に触れて、若い世代の後輩諸君への激励と応援をお願いします。

30周年を節目として、本会が今後益々発展し、会員各位の親睦のみならず医学、文化両面での向上に寄与することを心から祈念いたします。

～市整会 5 年の歩み～

市整会総会、研修会、学術講演会、新年会

(平成 9 年 6 月～平成14年 6 月)

医) 医邦会 阪本医院

阪 本 邦 雄

(昭和53年入局)

市整会の計画年度は、毎年 4 月 1 日に始まり次年度の 3 月31日に終了いたします。この間、研修会、文化講演会、総会、新年会の各行事日程は、4 月に総会、1 月に新年会を行い、研修会、学術講演会を年 2 ～ 4 回開催致しております。

新年会では、大学関係の島津名誉教授、山野教授（当時）、中村講師（当時）の御講演をお願いし、その後の懇親会では、ご夫人も参加していただき楽しく、催しております。

総会では、主に理事会で決定された事業報告や事業計画案、会計報告や予算案、審議事項などの承認、70歳になられた名誉会員の先生方の表彰および新入会員の先生方の御紹介などを行い、同時に大学院の先生方による各研究テーマの講演やその時に応じた演者による御講演などをお願いいたしております。

研修会、学術講演会では、時に文化講演をお願いして時に応じて保険審査や保険改正の講義など、我々の日常の診療ならびに経営にも役に立つ情報を提供いたしております。

平成 9 年 6 月28日に市整会25周年記念祝賀会を帝国ホテルで催し、その後 5 年間の市整会年間行事を以下振り返ってみました。

平成 9 年

6 月28日	25周年記念パーティー	帝国ホテル	参加者107名
10月25日	研修会	三井アーバンホテル大阪ベイタワー	参加者 43名
	「骨・軟部腫瘍の診断と治療」	淀川キリスト教病院	高見勝次先生
	「健保の審査のありかた」	国保審査委員	鈴木 隆先生
11月29日	研修会	三井アーバンホテル大阪ベイタワー	参加者 40名
	「リウマチのケアと手術療法」	大阪市大助教授	油谷安孝先生
	「マラソンと人生」	大産大高	陸上部監督 中山竹道氏

平成10年

1 月24日	新年会	南海サウスタワーホテル	参加者 52名
	「韓国、台湾、イタリアでの招待講演から」	大阪市大教授	山野慶樹先生
4 月11日	総会	天王寺エコーホテル	参加者 40名
	「人工膝関節における運動解析よりのアプローチ」	大阪市大大学院	戸堂慎一先生

	「組織活動と刑事責任について」	市整会顧問弁護士	米田泰邦弁護士
6月27日	研修会 三井アーバンホテル大阪ベイタワー		参加者 89名
	「リウマチ性足部障害の治療について」	奈良県立医科大学整形外科教授	高倉義典先生
	「整形外科医に必要な局所麻酔薬の知識」	大阪市大麻醉科名誉教授	藤森 貢先生
9月12日	研修会 南海サウスタワーホテル		参加者 51名
	「脊椎外科の最近のトピックス」	大阪市立総合医療センター整形外科部長	松田英樹先生
	「老いとリズム・時計生物学から見た老人性痴呆」	元大阪府立大学教授	中嶋英治先生
10月24日	研修会 三井アーバンホテル大阪ベイタワー		参加者31名
	「整形外科領域における腫瘍の遺伝子転座」	大阪市大大学院	青野勝成先生
	「運動学からみた整形外科領域の外傷」	大阪市大名誉教授	島津 晃先生

平成11年

1月23日	新年会 南海サウスタワーホテル大阪		参加者 65名
	「21世紀に向けた整形外科」	大阪市大教授	山野慶樹先生
4月24日	総会 天王寺エコーホテル		参加者 41名
	「腰椎不安定症に対する固定術」	大阪市大大学院	小西定彦先生
5月29日	学術講演会 三井アーバンホテル大阪ベイタワー		参加者 79名
	「肩関節の診断と治療ー特に肩内視鏡下手術の適応と限界」	大阪市立北市民病院	原 好延先生
	「慢性関節リウマチの下肢手術・術前プランニングを中心に」	大阪医大	中島幹雄先生
11月6日	研修会 南海サウスタワーホテル大阪		参加者 46名
	「股関節全置換術の適応と成績」	大阪府立身体障害者センター付属病院	東 隆先生
	『『菊と刀』の著者 ルース・ベネディクトからのメッセージ」	関西大学 文学部教授	福井七子先生

平成12年

1月29日	新年会 南海サウスタワーホテル大阪		参加者 50名
	「脊椎外科における最小手術侵襲への挑戦」	大阪市大講師	中村博亮先生
4月22日	総会 南海サウスタワーホテル大阪		参加者 55名
	「健保審査で減点されないコツ」	タンダ医院	反田英之先生
	「整形外科領域における低出力超音波パルスの有用性について」	大阪市大大学院	島崎 朗先生
5月27日	学術講演会 南海サウスタワーホテル大阪		参加者 72名
	「腰椎椎間板ヘルニアへの経皮的髄核摘出術」	十三市民病院整形外科医長	河田 弘先生
	「脊椎インスツルメンテーションの意義と問題点」	関西医大	赤木繁夫助教授
11月18日	研修会 三井アーバンホテル大阪ベイタワー		参加者 41名
	「整形外科疾患と骨軟骨代謝」	大阪市大講師	小池達也先生
	「戦国武将と茶の湯」	向陽高等学校校長	中田善明先生

平成13年

1月13日	新年会 ウェスティンホテル		参加者 50名
	「日整会理事会Bone&Joint Decade」	大阪市大教授	山野慶樹先生
4月21日	総会 南海サウスタワーホテル大阪		参加者 45名
	「診療報酬請求のポイント」	国保審査委員	鈴木 隆先生
	「変形性膝関節症に対する運動療法の効果」	大阪市大大学院	宮口正継先生
6月23日	学術講演会 三井アーバンホテル大阪ベイタワー		参加者 53名
	「膝関節屈曲のメカニズムと変形性膝関節症への関与」	大阪市大講師	格谷義徳先生
	「エビデンスに基づくリウマチ治療」	神戸大学医学部臨床医学免疫内科教授	熊谷俊一先生
10月27日	研修会 梅田ウェスティンホテル		参加者 56名
	「反射性交感神経性ジストロフィーの最近の治療」	広島大学医学部附属病院リハビリテーション部助教授	宗重 博先生
	「診療所における医事紛争について」	木下整形外科医院	木下 孟先生
11月10日	特別研修会 三井アーバンホテル大阪ベイタワー		参加者 28名
	「橈骨遠位端骨折の治療について」	馬場記念病院整形外科	釜野雅行先生
	「古代人が語る古代人の病氣」	京都大学霊長類研究所教授	片山一道先生

平成14年

1月26日	新年会 三井アーバンホテル大阪ベイタワー		参加者 44名
	「脳梗塞の指の変形」	大阪市大名誉教授	島津 晃先生
2月16日	学術講演会 ホテル阪急インターナショナル		参加者108名
	「人工股関節の現状と今後の問題」	大阪市大講師	大橋弘嗣先生
	「脊椎所見から見た腰椎疾患の見直し」	日本赤十字医療センター リハビリテーション科部長・整形外科副部長	久野木順一先生
4月20日	総会 南海サウスタワーホテル大阪		参加者 55名
	「スポーツにおける肩甲骨周辺機能の役割・脱整形外科的概念の紹介」	大野記念病院整形外科	田中直史先生
	「今回の診療報酬改正対策について」(追加講演)	日本経営(医療経営コンサルタント会社)	重廣 健氏
6月22日	学術講演会 三井アーバンホテル大阪ベイタワー		参加者 60名
	「弾撥指の臨床像と腱鞘外注射」	国立大阪病院整形外科	香月憲一先生
	「膝半月板損傷の治療」	神戸大学大学院医学研究科助教授	吉矢晋一先生

～市整会 5 年の歩み～

市整会ゴルフコンペ

(平成10年～平成14年)

医) 楯整形外科

楯 憲一郎

(昭和52年入局)

市整会ゴルフコンペは、会員の皆さんの親睦を深めていただく目的で平成5年に始まり、今年で第10回を迎えました。毎年、7月下旬という梅雨明けの一番暑い時期にもかかわらず、大勢の先生方の参加をいただいております。

今年の2回にわたる医療法の改正で、特に私達、整形外科の開業医は受難の時代を迎えました。お互いの情報交換の場として、憩いの場として、また、ストレス解消法（逆にストレスになる場合も多々ありますが…）として、これからも活用していただけたらと思います。

★泉ヶ丘カントリークラブも約2年ほど前に、大幅なコース改造を行い乗用カートを導入し戦略的な面白いコースに仕上がっていると思います。

★競技方法は、ダブルペリア方式、6インチリブレース可、ホワイトティー使用としております。

★過去5年間の競技成績は以下のとおりです。

① 第6回 市整会ゴルフコンペ

日 時 平成10年7月26日(日)

場 所 泉ヶ丘カントリークラブ

天 候 晴れ

参加者 31名

☆第6回目は個々の成績表を紛失しましたので、参加された先生方のお名前と、入賞者の成績のみとさせていただきます。尚、ハンデは、第6回目参加時のものであり、自己申告以外の方は私が独断で決めさせていただきます。

順不同です。

氏名	HC	氏名	HC	氏名	HC
石上 直	33	佐久間幸雄	25	原 好延	15
伊藤 成幸	34	沢井 康悦	20	南平 克積	12
上田 晏弘	5	杉本 欣也	17	森沢 康二	10
榎本 高明	21	鈴木 隆	20	山下 豊	28
柿本 俊夫	18	楯 憲一郎	10	山中 健作	15
鍵山 博士	15	楯 文子		吉川 秀明	26
楠 正敬	19	妻鹿 利和	15	吉田研二郎	28
坂井 和夫	8	中州 裕	26	吉中 正好	6
坂井富貴子		中野 博友	10	頼 功	13
阪本 邦雄	36	中村 薫	15	渡辺 径宏	11
中本 達郎	26				

	氏名	岩湧	葛城	Gross	H.C	Net
優 勝	中本達郎	50	48	98	28.8	69.2
準優勝	中村 薫	43	46	89	18	71
3 位	中野博友	41	39	80	7.2	72.8
4 位	上田晏弘	39	39	78	4.8	73.2
5 位	榎本高明	47	52	99	25.2	73.8

② 第7回 市整会ゴルフコンペ

日 時 平成11年 7 月25日 (日)

場 所 泉ヶ丘カントリークラブ

天 候 晴れ

参加者 22名

氏名	岩湧	葛城	Gross	H.C	Net	氏名	岩湧	葛城	Gross	H.C	Net
中本 達郎	43	47	90	19.2	70.8	杉本 欣也	47	46	93	18.0	75.0
喜馬 秀樹	45	47	92	20.4	71.6	楯 憲一郎	48	42	90	14.4	75.6
坂井 和夫	45	39	84	12.0	72.0	渡辺 径宏	54	41	95	19.2	75.8
山下 豊	50	48	98	25.2	72.8	中州 裕	48	47	95	19.2	75.8
中野 博友	42	41	83	9.6	73.4	原 好延	46	50	96	19.2	76.8
若林 亘	47	47	94	20.4	73.6	小松 堅吾	38	44	82	4.8	77.2
山中 健作	42	39	81	7.2	73.8	沢井 康悦	49	50	99	21.6	77.4
久保 俊雄	48	45	93	19.2	73.8	柿本 俊夫	47	45	92	13.2	78.8
南平 克積	41	45	86	12.0	74.0	吉田研二郎	59	49	108	28.8	79.2
安井 明	49	43	92	18.0	74.0	中村 薫	44	46	90	7.2	82.8
吉中 正好	44	46	90	15.6	74.4	石上 直	64	55	119	36.0	83.0

優 勝 中本 達郎
準優勝 喜馬 秀樹
3 位 坂井 和夫
4 位 山下 豊
5 位 中野 博友

ベストグロス
山中 健作 42 39

③ 第8回 市整会ゴルフコンペ

日 時 平成12年 7 月30日 (日)

場 所 泉ヶ丘カントリークラブ

天 候 晴れ

参加者 33名

氏名	金剛	葛城	Gross	H.C	Net	氏名	金剛	葛城	Gross	H.C	Net
楯 憲一郎	42	41	83	12.0	71.0	喜馬 秀樹	38	44	82	6.0	76.0
中野 博友	46	43	89	18.0	71.0	南平 克積	52	46	98	21.6	76.4
中州 裕	47	47	94	22.8	71.2	吉田研二郎	47	56	103	26.4	76.6
久保 俊雄	45	48	93	20.4	72.6	渡辺 径宏	43	44	87	9.6	77.4
山下 豊	51	52	103	30.0	73.0	秋野 一男	52	54	106	27.6	78.4
宋 景泰	50	42	92	18.0	74.0	沢井 康悦	46	51	97	18.0	79.0
中本 達郎	50	53	103	28.8	74.2	鳴嶋 真人	49	44	93	13.2	79.8
山中 健作	38	45	83	8.4	74.6	三明 靖昌	58	58	116	36.0	80.0
吉中 正好	44	45	89	14.4	74.6	原 好延	49	53	102	21.6	80.4
杉本 欣也	46	49	95	20.4	74.6	鈴木 隆	50	58	108	27.6	80.4
片山 善嗣	44	44	88	13.2	74.8	天野 祐一	53	60	113	32.4	80.6
上田 晏弘	46	40	86	10.8	75.2	吉川 秀明	51	54	105	22.8	82.2
鍵山 博士	48	44	92	16.8	75.2	岡島 幹雄	55	56	111	28.8	82.2
石上 直	54	56	110	34.8	75.2	榎本 高明	55	56	111	27.6	83.4
頼 功	38	41	79	3.6	75.4	辰巳 一郎	54	66	120	36.0	84.0
森沢 康二	40	44	84	8.4	75.6	中村 薫	45	54	99	14.4	84.6
島田 永和	40	50	90	14.4	75.6						

優 勝 楯 憲一郎
準優勝 中野 博友
3 位 中州 裕
4 位 久保 俊雄
5 位 山下 豊

ベストグロス
頼 功 38 41

④ 第9回 市整会ゴルフコンペ

日 時 平成13年 7 月29日 (日)
場 所 泉ヶ丘カントリークラブ
天 候 晴れ
参加者 37名

氏名	葛城	岩湧	Gross	H.C	Net	氏名	葛城	岩湧	Gross	H.C	Net
吉中 正好	44	42	86	16.8	69.2	喜馬 秀樹	42	47	89	13.2	75.8
中村 薫	41	43	105	33.6	71.4	柳井 尚浩	47	54	101	25.2	75.8
山下 豊	43	47	90	18.0	72.0	坂井 和夫	44	45	89	13.2	75.8
安井 明	45	49	94	21.6	72.4	上田 晏弘	40	42	82	6.0	76.0
秋野 一男	49	55	104	31.2	72.8	南平 克積	40	42	82	6.0	76.0
中野 博友	41	43	84	10.8	73.2	沢井 康悦	48	46	94	18.0	76.0
柿本 俊夫	41	46	89	15.6	73.4	吉川 秀明	49	51	100	24.0	76.0
島田 永和	53	47	100	26.4	73.6	阪本 邦雄	57	56	113	36.0	77.0
中州 裕	42	51	93	19.2	73.8	中本 達郎	48	52	100	22.8	77.2
鳴嶋 真人	50	49	99	25.2	73.8	林 正樹	47	46	93	14.4	78.6
渡辺 径宏	47	49	96	21.6	74.4	岡島 幹雄	54	55	109	30.0	79.0
平田 宗興	47	49	96	21.6	74.4	鈴木 隆	50	46	96	16.8	79.2
頼 功	37	38	75	0.0	75.0	上釜 健市	54	45	99	19.2	79.8
片山 善嗣	40	40	80	4.8	75.2	三好 宏	54	55	109	28.8	80.2
森沢 康二	37	43	80	4.8	75.2	榎本 高明	60	52	112	31.2	80.8
楯 憲一郎	45	47	92	16.8	75.2	吉田研二郎	55	52	107	25.2	81.8
久保 俊雄	47	45	92	16.8	75.2	原 好延	52	48	100	18.0	82.0
山中 健作	47	45	92	16.8	75.2	伊藤 成幸	58	60	118	36.0	82.0
天野 祐一	52	57	109	33.6	75.4						

優 勝 吉中 正好
準優勝 中村 薫
3 位 山下 豊
4 位 安井 明
5 位 秋野 一男

ベストグロス
頼 功 37 38

⑤ 第10回 市整会ゴルフコンペ

日 時 平成14年 7 月28日 (日)
場 所 泉ヶ丘カントリークラブ
天 候 晴れ
参加者 31名

氏名	葛城	岩湧	Gross	H.C	Net	氏名	葛城	岩湧	Gross	H.C	Net
吉中 正好	42	39	81	9.6	71.4	中村 薫	49	48	97	21.6	75.4
楯 憲一郎	45	36	81	9.6	71.4	頼 功	50	50	100	24.0	76.0
豊川 英樹	47	45	92	20.4	71.6	片山 善嗣	44	41	85	8.4	76.6
中野 博友	41	43	84	12.0	72.0	渡辺 径宏	50	52	102	25.2	76.8
鳴嶋 真人	55	47	102	30.0	72.0	中本 達郎	48	47	95	18.0	77.0
原 好延	45	48	93	20.4	72.6	柿本 俊夫	50	49	99	21.6	77.4
南平 克積	48	43	91	18.0	73.0	上田 晏弘	42	44	86	8.4	77.6
島田 永和	48	41	89	15.6	73.4	吉田研二郎	49	49	98	20.4	77.6
吉川 秀明	50	54	104	30.0	74.0	古瀬 洋一	60	55	115	36.0	79.0
山中 健作	37	48	85	10.8	74.2	小松 堅吾	44	45	89	9.6	79.4
安井 明	45	45	90	15.6	74.4	榎本 高明	65	51	116	36.0	80.0
山下 豊	43	46	89	14.4	74.6	鍵山 博士	44	56	100	19.2	80.8
喜馬 秀樹	43	51	94	19.2	74.8	秋野 一男	51	54	105	24.0	81.0
沢井 康悦	53	58	111	36.0	75.0	西沢 徹	64	61	125	36.0	89.0
中州 裕	45	46	91	15.6	75.4	阪本 邦雄	68	58	126	36.0	90.0

優 勝 吉中 正好
準優勝 楯 憲一郎
3 位 豊川 英樹
4 位 中野 博友
5 位 鳴嶋 真人

ベストグロス
吉中 正好 42 39

～市整会 5 年の歩み～

市整会家族会

(平成 9 年 6 月～平成14年 6 月)

南平整形外科

南 平 克 積

(昭和46年入局)

平成 9 年 9 月 28 日 (日)

神戸 布引ハーブ園、北野異人館散策、中華料理東天閣にて会食

参加26名

平成10年10月18日 (日)

台風11号襲来にて淡山神社方面の旅行中止

平成11年10月17日 (日) 前年中止の計画を挙行

奈良・桜井 淡山神社の紅葉と蹴鞠鑑賞、御破裂山登頂、多武峰観光ホテルでの会食

参加37名

平成12年10月29日 (日)

和歌山城をボランティアガイドの案内で散策、西の丸庭園にて抹茶、料亭六三園にて会食

和歌山の菱川先生にお世話になりました。

参加33名

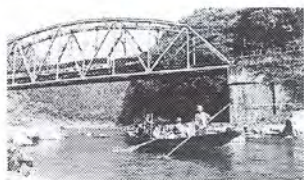
平成13年10月28日 (日)

京都 保津川下りと天竜寺・野宮神社散策 料亭渡月亭にて会食

参加41名

以上 担当 厚生係：杉本欣也、南平克積、楯憲一郎、天野祐一





～市整会 5 年の歩み～

市整会会員と勤務医との交流ゴルフコンペと 自由参加ツアー

(平成 9 年～平成14年)

医) 頼整形外科クリニック

頼 功

(昭和49年入局)

1995年から毎年12月の年末に市整会有志によるゴルフ研修のためのゴルフコンペを行っていました。初回が3組のゴルフコンペでスタートしましたが、回を重ねていくうち組数が増えていき、途中から市整会会員と勤務医との交流ゴルフコンペ(団体対抗戦)の様相に変わっております。今では10組前後のゴルフコンペの賑やかな懇親の場となっております。また、ゴルフコンペをきっかけで鹿児島ゴルフ自由参加ツアーが2001年から始まっております。と言いますのは、第6回ゴルフコンペ(この頃から以前の伝統あるコンペの復活としてスケルトンゴルフコンペと命名しております)を1999年12月26日(日)に奈良のオークモントゴルフクラブ(毎年ほとんどこのクラブで開催)で企画し(10組のコンペ)、皆様にゴルフクラブに集合していただきました。ところが第1組がスタートしてグリーンでパットしようとしたときにゴルフ場一面が雪景色に変わりクローズになってしまいました。コンペは急遽中止となり、閉会となりましたが、ほとんどの先生方が帰路の路面が凍結していて帰るに帰れず、皆さんクラブハウスに戻ってこられて雪見酒宴会に早替わりとなりました。この時鹿児島から遠路はるばるコンペにご参加頂いていました平田宗興先生(S48入局)と久し振りにお会いする先生方とが楽しく歓談していた際に持ち上がったのが鹿児島ゴルフ自由参加ツアーであります。第1回が2001年2月10、11、12日(2泊3日)、第2回が2002年2月9、10、11日(2泊3日)に開催しました。奥様、ご家族同伴でご参加頂いた先生もいらっしゃいます。温泉と夜の鹿児島グルメ観光もあり、鹿児島を十分に満喫しました。鹿児島在住の大阪市大医学部整形外科教室同門会の上釜健市先生(S41入局)並びに平田宗興先生には大変お世話になり、ゴルフも一緒に楽しくラウンドしていただきました。

なお、本年度(2002年)のスケルトン忘年会ゴルフコンペは12月1日(日)、オークモントC.C.で行われる予定。又、鹿児島ゴルフ自由参加ツアーは来年以降も企画致しますので奥様をお誘い合わせて奮ってご参加下さい。

競技会成績表(1997年～2002年)

スケルトン忘年ゴルフコンペ

第4回(1997.12.28 於 オークモントGC)ハンディキャップ競技(S～Eコース)

RESULT	NAME	SOUTH	EAST	GROSS	H.D.C.P	NET	
優 勝	中洲 裕	45	47	92	26	66	ベストグロス賞
準優勝	中本 達郎	47	49	96	26	70	小松 堅吾
3 位	伊藤 成幸	50	55	105	34	71	ドラコン賞

4 位	中村 薫	48	42	90	15	75	吉田研二郎
5 位	秋野 一男	55	50	105	30	75	越川 亮
6 位	小松 堅吾	46	40	86	10	76	ニアピン賞
7 位	南平 克積	46	42	88	12	76	頼 功
8 位	鈴木 隆	49	49	98	20	78	小松 堅吾
9 位	頼 功	47	45	92	13	79	
10 位	吉川 秀明	57	53	110	26	84	
11 位	渡辺 径宏	47	47	94	9	85	
12 位	森沢 康二	51	44	95	10	85	
13 位	楯 憲一郎	48	49	97	11	86	
B. B	吉田研二郎	59	51	110	22	88	
B. M	越川 亮	60	47	107	18	89	

ゴシック体：勤務医

(敬称略)

第5回(1998.12.27 於 オークモントGC) ダブルベリア(W～Sコース)

RESULT	NAME	WEST	SOUTH	GROSS	H.D.C.P	NET	
優 勝	南平 克積	46	42	88	15.8	71.2	ベストグロス賞
準優勝	頼 功	44	43	87	15.6	71.4	小松 堅吾
3 位	坂井 和夫	38	44	82	9.6	72.4	ドラコン賞
4 位	小松 堅吾	37	42	79	6	73	格谷 義徳
5 位	楯 憲一郎	53	47	100	26.4	73.6	上田 晏弘
6 位	安井 明	55	49	104	30	74	ニアピン賞
7 位	豊川 英樹	41	43	84	9.6	74.4	南平 克積
8 位	堀澤 欣弘	49	45	94	19.2	74.8	中本 達郎
9 位	鈴木 隆	49	50	99	24	75	頼 功
10 位	原 好延	59	46	94	14.4	76.2	宗 景泰
11 位	中洲 裕	43	61	104	27.6	76.4	
12 位	山下 豊	52	52	104	27.6	76.4	
13 位	中本 俊毅	43	48	91	14.4	76.6	団体戦
14 位	上田 晏弘	44	46	90	13.2	76.8	ベスト8までのグロス合計
15 位	成田 信哉	54	46	100	22.8	77.2	(ハンディなし)
16 位	中本 達郎	52	53	105	27.6	77.4	市整会グループ
17 位	吉田研二郎	50	50	100	21.6	78.4	731 ○
18 位	坂中 秀樹	60	55	115	36	79	勤務医グループ
19 位	格谷 義徳	44	46	90	10.8	79.2	744 ●
20 位	鍵山 博士	48	46	94	24.4	79.6	
B. B	宗 景泰	43	50	93	23.2	79.8	
B. M	阪本 邦雄	60	69	129	36	93	

ゴシック体：勤務医

(敬称略)

第6回(1999.12.26 於 オークモントGC) 雪で中止

第7回(2000.12.03 於 オークモントGC) ダブルペリア(W～Sコース&E～Wコース)

RESULT	NAME	E	W	S	GROSS	H.D.C.P	NET	
優勝	森北 育宏	44	39		83	10.8	72.2	ベストグロス賞
準優勝	堀澤 欣弘	50	54		104	31.2	72.8	W～Sコース 豊川 英樹
3位	本田 泰郎	45	51		96	22.8	73.2	E～Wコース 森北 育宏
4位	頼 功		42	41	83	9.6	73.4	ドラコン賞
5位	吉中 正好	53	48		101	27.6	73.4	吉田研二郎
6位	岩城 啓好	41	52		93	19.2	73.8	久保 俊雄
7位	天野 祐一	48	56		104	30.0	74.0	森北 育宏
8位	井浜 潤二	52	50		102	27.6	74.4	森北 育宏
9位	南平 克積	46	51		97	21.6	75.4	
10位	久保 俊雄		49	48	97	21.6	75.4	ニアピン賞
11位	中村 英健	40	44		84	8.4	75.6	豊川 英樹
12位	中洲 裕		39	51	90	14.4	75.6	豊川 英樹
13位	中本 達郎	54	53		107	31.2	75.8	豊川 英樹
14位	格谷 義徳		47	48	95	19.2	75.8	鍵山 博士
15位	鍵山 博士		47	47	94	18.0	76.0	堀澤 欣弘
16位	楯 憲一郎	47	47		94	18.0	76.0	堀澤 欣弘
17位	安井 明		50	50	100	24.0	76.0	森北 育宏
18位	豊川 英樹		39	40	79	2.4	76.6	本田 泰郎
19位	吉田研二郎		49	51	100	22.8	72.2	
20位	渡辺 径宏		42	54	96	18.0	78.0	
21位	河田 弘		59	55	114	36.0	78.0	
22位	小松 堅吾		50	51	101	22.8	78.2	
23位	中村 薫		47	54	101	22.8	78.2	
24位	島田比呂志		55	57	112	33.6	78.4	
25位	山本 公作	55	56		111	32.4	78.6	団体戦
26位	山中 健作	47	42		89	9.6	79.4	ベスト11までのグロス合計
27位	秋野 一男	54	53		107	27.6	79.4	(ハンディ42)
28位	八木 宏之		56	57	113	33.6	79.4	市整会グループ
29位	京 宗三	46	53		99	19.2	79.8	1042 ●
30位	川満 政之	56	47		103	22.8	80.2	勤務医グループ
31位	原 好延	54	58		114	31.2	80.6	1000 ○
32位	岡島 幹雄		54	63	117	34.8	82.2	(1042-42)
33位	島本 敬三	59	50		109	26.4	82.6	

34 位	林 成治	54	55	109	26.4	82.6
35 位	鈴木 隆	58	61	119	36.0	83.0
36 位	阪本 邦雄	57	63	120	36.0	84.0
B. B	恵木 丈	55	49	104	19.2	84.8
B. M	乾 健太郎	65	60	126	33.6	31.4

ゴシック体：勤務医

(敬称略)

第8回(2001.12.02 於 オークモントGC) ダブルベリア(W～Sコース&S～Eコース)

RESULT	NAME	E	W	S	GROSS	H.D.C.P	NET	
優勝	安井 明	41		46	87	18.0	69.0	ベストグロス賞
準優勝	南平 克積	45		47	92	21.6	70.4	W～Sコース 頼 功
3 位	頼 功		39	38	77	4.8	72.2	E～Wコース 豊川 英樹
4 位	中村 英健	43		44	87	14.4	72.6	ドラコン賞
5 位	坂井 和夫	41		47	88	14.4	73.6	上田 晏弘
6 位	長浜 信一	42		50	92	18.0	74.0	頼 功
7 位	上田 晏弘		40	48	88	13.2	74.8	森北 育宏
8 位	岩城 啓好		43	38	81	6.0	75.0	中村 英健
9 位	喜島 秀樹		43	42	87	12.0	75.0	ニアピン賞
10 位	森北 育宏	48		43	91	15.6	75.4	頼 功
11 位	榎本 高明	51		50	101	25.2	75.8	頼 功
12 位	吉田研二郎	47		52	99	22.8	76.2	頼 功
13 位	堀澤 欣弘		49	56	105	28.8	76.2	岩城 啓好
14 位	吉中 正好		44	42	86	9.6	76.4	島田 永和
15 位	西口 豊憲	50		54	104	27.6	76.4	南平 克積
16 位	鈴木 隆	50		53	103	26.4	76.6	坂井 和夫
17 位	古瀬 洋一	49		51	100	22.8	77.2	鈴木 隆
18 位	中洲 裕	48		50	98	20.4	77.6	
19 位	島本 敬三	55		48	103	25.2	77.8	団体戦
20 位	鍵山 博士	55		53	108	30.0	78.0	ベスト11までのグロス合計
21 位	島田 永和	50		45	95	16.8	78.2	(ハンディ44)
22 位	格谷 義徳		49	52	101	22.8	78.2	市整会グループ
23 位	豊川 英樹	44		41	85	6.0	79.0	983 ○
24 位	原 好延		48	53	101	21.6	79.4	勤務医グループ
25 位	中村 薫		49	52	101	21.6	79.4	1014 ●
26 位	中本 達郎		46	52	98	18.0	80.0	(1058-44)
27 位	伊藤 成幸		59	58	117	36.0	81.0	
28 位	久保 俊雄		52	52	104	22.8	81.2	
29 位	大木 毅	55		60	115	33.6	81.4	

30 位	平田 繁	52	60	101	16.8	84.2
31 位	岡島 幹雄	61	60	121	36.0	85.0
32 位	秋野 一男	48	63	111	25.2	85.8
B. B	河田 弘	55	56	111	22.8	88.2
B. M	西沢 徹	72	67	139	36.0	103.0

ゴシック体：勤務医

(敬称略)

鹿児島ゴルフ自由参加ツアー

第1回：2001. 2. 10～12（土、日、月の連休）参加者23名（男性15名、女性6名、子供2人）

2. 11（日）晴れ 指宿ゴルフクラブ ダブルペリア

RESULT	NAME	OUT	IN	GROSS	H.D.C.P	NET	
優勝	上釜 健市	41	49	90	19.2	70.8	ベストグロス賞
準優勝	上田 晏弘	41	40	81	9.6	71.4	中村 英健
3 位	豊川 英樹	41	39	80	7.2	72.8	ドラコン賞
4 位	吉田研二郎	46	49	95	21.6	73.4	上田 晏弘
5 位	頼 功	45	44	89	15.6	73.4	上田 晏弘
6 位	中村 英健	39	41	80	6.0	74.0	ドラ短賞
7 位	南平 克積	42	47	89	13.2	75.8	岡島 幹雄
8 位	杉本 欣也	48	47	95	19.2	75.8	岡島 幹雄
9 位	安井 明	51	53	104	27.6	76.4	ニアピン賞
10 位	平田 宗興	43	41	84	7.2	76.8	上釜 健市
11 位	岡島 幹雄	53	49	102	25.2	76.8	吉田研二郎
12 位	三木 邦彦	54	48	102	24.0	78.0	頼 功
13 位	原 好延	46	55	101	22.8	78.2	平田 宗興
14 位	妻鹿 和子	46	49	95	16.8	78.2	
15 位	妻島 利和	51	48	99	19.2	79.8	
16 位	伊藤 成幸	55	62	117	36.0	81.0	
B. B	頼 秀子	59	58	117	34.8	82.2	
B. M	伊藤 宏子	58	64	122	36.0	86.0	

(敬称略)

* 三木邦彦様：故嶺義信先生の甥

観光組：原マキ子様（原 好延の奥様）、

三木邦彦様のご家族

2. 12（月）晴れ 指宿ゴルフクラブ ダブルペリア

RESULT	NAME	OUT	IN	GROSS	H.D.C.P	NET	
優勝	安井 明	46	45	91	20.4	70.6	ベストグロス賞
準優勝	豊川 英樹	44	41	85	13.2	71.8	上釜 健市

3 位	吉田研二郎	53	52	105	31.2	73.8	ドラコン賞
4 位	中村 英健	42	44	86	12.0	74.0	上田 晏弘
5 位	上釜 健市	42	43	85	10.8	74.2	平田 宗興
6 位	三木 邦彦	49	47	96	21.6	74.4	ドラ短賞
7 位	頼 功	49	45	94	19.2	74.8	岡島 幹雄
8 位	南平 克積	52	47	99	24.0	75.0	頼 秀子
9 位	上田 晏弘	42	44	86	10.8	75.2	ニアピン賞
10 位	原 好延	49	52	101	25.2	75.8	上田 晏弘
11 位	妻鹿 和子	51	49	100	24.0	76.0	上田 晏弘
12 位	妻鹿 利和	53	53	106	28.8	77.2	頼 功
13 位	杉本 欣也	43	53	96	18.0	78.0	妻鹿 和子
14 位	平田 宗興	45	44	89	10.8	78.2	
15 位	岡島 幹雄	54	55	109	30.2	79.0	
16 位	伊藤 成幸	56	58	114	34.8	79.2	
B. B	伊藤 宏子	58	62	120	34.8	85.2	
B. M	頼 秀子	65	73	138	36.0	102.0	

(敬称略)

観光組：原マキ子様（原 好延の奥様）、
三木邦彦様のご家族

第2回：2002. 2. 9～11（土、日、月の連休）参加者22名（男性15名、女性4名、子供3人）

2.10（日）晴れ 知覧カントリークラブ 新ペリア

RESULT	NAME	OUT	IN	GROSS	H.D.C.P	NET	
優勝	頼 功	47	46	93	20.4	72.6	ベストグロス賞
準優勝	三木 邦彦	50	48	98	22.8	75.2	平田 宗興
3 位	平田 宗興	48	39	87	10.8	76.2	ドラコン賞
4 位	吉中 正好	48	44	92	15.6	76.4	？・？
5 位	小松 堅吾	50	47	97	20.4	76.6	ドラ短賞
6 位	上釜 健市	46	49	95	18.0	77.0	？・？
7 位	浜平 忠宏	49	58	107	28.8	78.2	ニアピン賞
8 位	渡辺 径宏	51	48	99	20.4	78.6	？・？
9 位	小松ミワ子	49	49	98	19.2	78.8	？・？
10 位	杉本 欣也	49	48	97	16.8	80.2	
11 位	南平 克積	52	49	101	20.4	80.6	
12 位	楯 憲一郎	46	48	94	13.2	80.8	
13 位	豊川 英樹	47	55	102	19.2	82.8	
14 位	西沢 徹	60	62	122	34.8	87.2	
15 位	頼 秀子	60	66	126	36.0	90.0	

16 位	伊藤 成幸	58	68	126	34.8	91.2
B. B	伊藤 宏子	62	67	129	36.0	93.0
B. M	大山 泰治	65	72	122	36.0	101.0

(敬称略)

* 三木邦彦様：故嶺義信先生の甥

浜平忠宏様：豊川英樹先生の義父

大山泰治様：第一製薬㈱のMR

観光組（里帰り）：豊川秀樹様のご家族

2.11（月）雪のち晴れ 霧島ゴルフクラブ ダブルペリア（雪のためハーフだけのラウンドのコンペ）

RESULT	NAME	OUT	IN	GROSS	H.D.C.P	NET	
優勝	頼 功	36	45	81	9.6	71.4	ベストグロス賞
準優勝	吉中 正好	36	44	80	8.4	71.6	小松 堅吾
3 位	小松ミワ子	36	48	84	12.0	72.0	ドラコン賞
4 位	小松 堅吾	36	42	78	6.0	72.0	豊川 英樹
5 位	南平 克積	36	45	81	8.4	72.6	頼 秀子
6 位	杉本 欣也	36	50	86	12.0	74.0	ドラ短賞
7 位	上田 晏弘	36	44	80	6.0	74.0	伊藤 成幸
8 位	三木 邦彦	36	54	90	15.6	74.4	頼 秀子
9 位	渡辺 径宏	36	53	89	14.4	74.6	ニアピン賞
10 位	楯 憲一郎	36	45	81	6.0	75.0	小松 堅吾
11 位	豊川 英樹	36	44	80	3.6	76.4	小松 堅吾
12 位	頼 秀子	36	59	95	18.0	77.0	
13 位	上釜 健市	36	49	85	7.2	77.8	
14 位	大山 泰治	36	58	94	15.6	78.4	
15 位	平田 宗興	36	46	82	3.6	78.4	
16 位	伊藤 成幸	36	57	93	14.4	78.6	
B. B	伊藤 宏子	36	59	95	15.6	79.4	
B. M	西沢 徹	36	60	96	14.4	81.6	

(敬称略)

観光組（里帰り）：豊川英樹様のご家族

写真家として

医) 有馬整形外科医院

有馬清徳

(昭和30年入局)

私とカメラとの付き合いは小学校時代に遡る。戦前、大阪の船場（現在の中央区の間屋街）で育った私の隣家がカメラ店を営み、また堺筋通りにはライカの代理店があったので、ボックスカメラや、セミパールと云った歴史上のカメラでスナップ写真を撮楽しんだものである。

大学での医学会への発表に使うスライドの作成は当時（昭和30年代）は自分で手描きした原稿を撮影現像して作ったもので、白い線の部分にカラーを入れたり工夫をこらしたものだ。したがってカメラは常に身近なものでペンタックス、ミノルタ、ニコンなどの35mm版を使っていたが、自らの撮影作品を発表することなどは思いもよらないことであった。

私は昭和40年（当時関西労災病院勤務中）から約10年間勤務の合間に自動車レースに参加し、鈴鹿、富士サーキットを走り、最高3位の成績を得、また競技役員として全日本選手権、12時間耐久レースなどの競技長、コース委員長、救急委員長をも勤めた。その後、ラリーに転向、非力な「いすゞベレット」を駆って日本各地を転戦し1973年、全日本ラリー選手権のチャンピオンを獲得することができた。レース、ラリー時代は写真を撮られる被写体側であり、自動車新聞や、オートスポーツ誌の表紙を飾ったのも嬉しい思い出である。

本格的に写真に携わるようになったのは、昭和50年代（昭和46年有馬整形外科開業）で、ヨーロッパアルプスへの旅行で撮った写真が当時西宮市医師会カメラ部の講師をされていた写真家、故・本庄光郎氏（戦前、戦後を通じて関西写真会の長老）に見出されてからである。「マッターホルン4景」と題する組写真が西宮市展で大谷記念美術館賞に入賞したのだ。

以来、「モロッコの職人達」、「ケニヤの女」、「ピラミッド」の三作が3年連続で西宮市展賞を頂き、西宮芸術文化協会に推挙され、有限会社スタジオ・アルファを設立し写真作家の道を歩み始めたのである。

私共、常に患者さんをかかえている開業医は好き勝手に休診して撮影旅行に行けるわけがなく、したがって私の撮影旅行は、正月、お盆、ゴールデンウィークの年3回に限られ、そのため物見遊山的観光旅行ではなく、当初より撮影テーマを決めて旅行地を選ばねばならなかった。

1985年中国・パキスタン国境のクンジェラブ峠（標高500m）が外国人に開放されたのを機に、それまでに取材していた地域を含めて、シルクロードの中国よりローマまでの踏破を狙い、中国、パキスタン、シリア、ヨルダン、トルコ、ギリシャ、イタリアを取材、さらに1980年代お互いに交戦中であったイラン、イラクを1990年、1991年に取材、ここに全行程25000kmのシルクロード「時は光のなかに」写真展、写真集を（1987～1992年）東京、大阪で発表して大好評を得るに至った。また「シルクロード・ローマへの道」は1996年、大阪阪神百貨店と奈良市写真美術館の企画で再度発表の機会を得た。

次にシルクロード取材中の1988年暮、南極取材の機会を得、正月中心の17日間ではあったが好天に恵まれ、写真展「南極光」（1989～1990）、「南極パラダイス」（1997）を東京、神戸、大阪、京都で発表、写真集も出版することができた。

第3弾として、我々の民族の祖先のモンゴロイドが東アフリカから移住、拡散してアメリカ大陸へと渡っ

た民族の歴史の道であるシベリア北極圏からベーリング海峡を経てアラスカ地方への取材に入った（1991～1998年）。

シベリア、アラスカの少数民族の生活と極北の姿を追いつけ、（殆んどはヘリコプター使用の取材）冷戦時代には踏み入れることのできなかった米・ロ国境のベーリング海峡に昇る太陽の姿を4年間の苦難の末撮影に成功し、1998年東京、大阪で発表し、写真集「ベーリング海峡」（東京出版）の出版も行った。この写真集は、日本図書館協会の推薦図書に選ばれ、全国の新聞、週刊誌などにも記事とともに報道されたのである。

以上が私の写真作家としての活動した20年の歩みであるが、前半の「シルクロード」に続く「南極」と、「北極圏ベーリング海峡」の3つのライフワークを成し遂げることができたのは、写真家冥利と云えるだろう。今後も自らのテーマに向って、体の続くかぎり「光」を求めたいと念ずるものである。

現在、私は日本写真作家協会常任理事として、500名の会員を擁する会の運営と、東京、神戸、広島で発表する日本写真作家協会展や企画展、ゼミナールなどの事業に携わり、日本写真協会、日本旅行写真家協会、日本写真芸術学会の会員として、また、地元の兵庫県写真作家協会、西宮芸術文化協会の会員、白光写友クラブ会長としてよりクリエイティブな作品を発表し、また会員の指導、育成に努めている。



彫塑

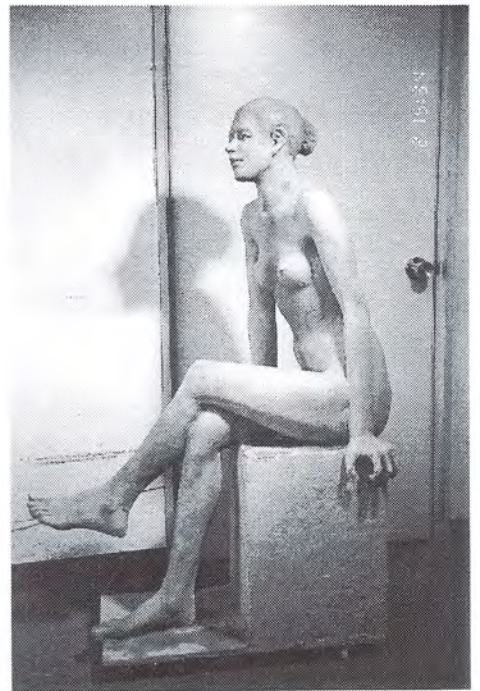
石上外科

石 上 直

(昭和32年入局)

性懲りもなく続けています。二科展入選も18回目を迎えました。ここしばらくは主として具象作品を作っており、自分なりにより完璧なものにしようと目論んできています。

最近の作品を提示させていただきました。いずれも等身大のブロンズ像です。



第86回二科展 「五色浜」



第85回二科展 「いなみの海」



第83回二科展 「渚」

私の娯楽は絵画

医) 近藤整形外科

近 藤 正 樹

(昭和46年入局)

いつから油絵を始めたのですか、と尋ねられることがよくある。両親が趣味で描いていたから、小学生の身分でありながら自然発生的に油絵を描いていた。指導してくれたのは勿論父と母であった。

さらに成蹊学園時代に師事した関合正明画伯の影響力は大きかった。師は作家の壇一雄と親交が厚く、酒を酌み交わし文学論を口説く風変わりな画家であった。"リアリティを追求せよ"が師の口癖であった。この成蹊学園時代に培った絵画が私の基礎となっている。

このころ東京新宿伊勢丹デパートでグループ展を開催し好評だった。

一寸回り道して大阪市大医学部に編入して来たら美術部がなく、小谷教授に顧問をお願いして同好会を創設し仲間と描き続けたので、4回生のときには大阪北浜の高麗橋画廊で個展を開くことができた。自分の描いた絵を人に批評してもらいたくなるものである。

私にとって絵を描くことは趣味と言うより娯楽的なのである。テーマ、モチーフ、構図さらに色彩を決めるために夢中になり、イメージをふくらましている内に寝食を忘れることが多い。この忘我の時間が最高の娯楽であり心が癒される。満足するイメージをふくらませられなくてもよいのである。司馬遼太郎は小説作法の過程で資料が無い時はよい想像力が浮かばないが浮かばなくても想像しているときは娯楽になる、と書いていた。

本格的に油絵を描いたのは医学生時代であり、その時の作品の一部を皆さんにお目にかけている。

〈こぼとけ〉30号油彩は昭和42~43年ころ旧医学部臨床講堂前の学生休憩コーナーに掛けてありました。また昭和58年ころ竣工した医学部図書館館長の助川教授から島津教授を介して絵を一枚寄贈するよう要請があり、選んだ作品〈のろま人形〉10号油彩は図書館の受付近くに掛けて頂いた。

市大整形25周年記念行事には〈ストラスブールの小路〉8号油彩と〈成蹊学園〉10号油彩を出品させてもらい、〈ストラスブールの小路〉は同窓会誌の表紙絵にもなりましたので御覧頂けたかと思います。

さらに市大整形50周年記念行事には〈ストラスブール遠望〉8号油彩と〈アルザス地方〉10号油彩を出品させて頂いた。

近くの県立美術館で大原美術館所蔵展をやっていたので残暑厳しい昼下がりに二度も行ってきた。岸田劉生童女の舞姿をはじめ、佐伯裕三ら巨匠の作品が目白押しでこんな絵が描きたい、すばらしいと刺激され感動しどうやったら描くことができるのか？ああ、すばらしいと感動して帰りました。

ここで私の絵画技法を少し紹介しますと、モチーフとしては風景や静物が多く、郷里の風景、学園キャンパス、二度の留学先ストラスブール(フランス)風景など見慣れた場所が描きやすく、構図は遠近法を用いて白い画布にいきなりローアンバーで下絵をデッサンし始める。

絵はモチーフのコピーではなく自分から生まれるものであるから、印象派の色彩分割のタッチと平行してセザンヌやマチスのような固有色から解放された主観色を採り入れて独自の絵を描きたいと思っている。

製作は書斎兼アトリエに閉じこもり深夜におよんでいた。しかし最近は家族が匂いに敏感で油彩画は描かせてもらえない。ペインティングオイルや溶き油の匂いが原因らしい。

仕方が無いから娯楽としてデッサン、クロッキー、スケッチ、淡彩画、美術鑑賞などを気の向くままに楽しんでいる。



ゴルフと私

医) 頼整形外科クリニック

頼 功

(昭和49年入局)

クラブを握って約30年になります。大阪市大医学部付属病院の研修医時代に同期の越川亮先生に引っ張られてゴルフの打ち放しにいったのが最初であったと思います。そのときは越川先生が比較的真っ直ぐにボールを飛ばしていたのに対して私の打球は右に左にと曲げてしまい、思うように飛んでくれなかった。このスポーツは小生には不向きであると自分で自分を慰めていました。その後、研修医を終了して最初の赴任先の国立大阪病院で再びクラブを握る機会がめぐってきました。その病院に当時勤務されていた三明靖昌先生、山藤修輔先生、楯憲一郎先生そして高見勝次先生とご一緒にラウンドしたのが私の初ラウンドでありました。スコアが122であったのを覚えています。以来ゴルフをしてきましたが、実際熱心にゴルフをしていたのは大阪労災病院時代(昭和52年～平成元年)からで、この頃になってスコアがまとまるようになってきました。故下村先生、中村英健先生、平田先生が熱心にゴルフをやっておられ、また整形外科医局内でも部長先生以下過半数以上のゴルフに熱心なスタッフがおられ、さらに病院全体でもゴルフ熱が高かった(ゴルフだけでなくいろんなスポーツも盛んでした)。大阪労災病院の建物の裏庭に私設の打ち放し場(数名が同時に使用できる長さ約20mのCAGE)が作られていて、ゴルフのできる環境が整っていました。もっともその後この打ち放し場は時代の流れと共に取り壊され、今はありません。整形外科医局コンペ、総合医局ゴルフコンペそして病院ゴルフコンペもあり、さらに整形外科・外科医局対抗ゴルフコンペ(ゴルフボール数ダースを賭けて)など和やかな中にもちょっぴり厳しいゴルフで鍛えられて少しずつ上達できたように思います。当時の私は荒削りのゴルフをしていて(今でもそうですけど)、スコアメイクをまるっきり気にせずただ遠くに飛ばすのを喜びとするゴルフばかりしていたようです。中村英健先生や平田宗興先生らとドラコンを競っていたあの頃が懐かしく思い出されます。しかし整形外科・外科医局対抗ゴルフコンペのときに一緒にラウンドしていた外科の韓憲男先生(前育和会記念病院理事長)に、ティーショットで3,40ヤードオーバードライブしているのにもかかわらず、ホールアウトしてみればわたしがボギーで韓先生がパーという事が多く、韓先生にケラケラと笑われていました。整形外科・外科医局対抗戦では一緒にラウンドしている外科のドクターを崩さなければならないのに、私は韓先生とご一緒にラウンドする事が多く、大抵私がつぶされる事が多かったのであります。この医局対抗戦のルールは、ベスト11までのグロス合計で勝負を決め、負けチームが勝ちチームにチョコレートならぬゴルフボールを進呈するというものであります。戦績は両医局チームとも均衡していてあまり差がなかったようでしたが、負けてゴルフボールを相手チームに進呈するときはやはり悔しいものでした。現在、年末に行われていますスケルトンゴルフクラブでの市整会チーム対勤務医チームの対抗戦はこれを参考にして行われています。私はこの対抗戦ゴルフというものが割合と好きで、大阪労災病院の後に勤務した馬場記念病院でも整形外科・外科医局対抗戦をやっており、外科チームに負けないよう、自分を含め、若い医局員に叱咤激励してゴルフの上達を促したりしていました(対抗戦は大抵外科チームに負けてばかりでした)。その甲斐あって皆が腕を上げたようでした。その頃の私は、今も同様で、イーグル、バーディもでるときもあれば、多叩きをするホールもある、又、80前後でまわってくる時もあれば、100をたたくといった好不調の波の大

きいゴルフをしていました。現在のオフィシャル・ハンディが11ですが、17、8年前頃が13というふうにあまり進歩がないのであります。このたび市整会ゴルフコンペに平成11～13年の3年連続ベスグロをとったということでゴルフについて何かをとの事でしたが（尤も平成14年度は100をたたいています）、とても技術的なコメントはできません。理論的なゴルフよりも全く感覚的なゴルフをしており、又、どうもワイワイガヤガヤと楽しくラウンドするのが性に合っているのか、真剣にスポーツ競技として取り組むゴルフよりもレクレーションゴルフから抜けきらないため、なかなかシングルになれないのかなと自分を分析しています。これまで陸上、バスケットボール、サッカー、スキーやテニスなどいろんなスポーツをやってきましたが、昭和60年と平成5年に左膝関節前十字靱帯損傷、半月板損傷を受傷して以来、私に残されたスポーツは、ゴルフのみになっており、しかもアップダウンヒルを9番アイアンを杖にしながらのラウンドでエンジョイしております（何故かいまだに飛距離落ちず）。



いつかみた夢

坂本整形外科

坂 本 和 彦

(昭和56年入局)

現在、山の中に子供の時に描いたような世界を造りつつある。

それについて、この機会をお借りして書いてみたいと思います。

そもそも、父が他界して2年になる。借金もなかったが、大したものに残してくれてない。ただ、とある村に約1300年前から住み着いていたとされる末裔ゆえ、次男といえども当地に宅地と畑と何箇所かの山林があった。勿論、ほったらかしのままである。その山林の1箇所のみ私は所在を知っている。昔は、松茸がよくはえたからである。ほかの山林については、書類や地図を見ただけでは、一体どこからどこまでなのかどころか、どこにあるのかすらわからない。

ところで、私の子供は2人。いずれも女の子で山や自然に全く関心がない。また、この村とは将来かわることもほとんどないであろうから、遠くない将来、山林は手放すことになるのは必至である。それならば、好きにしまえということになる。

“ロビンソン・クルーソー”、“15少年漂流記”あるいは、アメリカ人の入植時のような、子供の時に描いていたような世界を造ろうと思い立った。

とても、一人の労力で出来ることではないので、学生時代からの山登りの友人のM君を巻き込んだ。作業が進んで行くうちに、地元医師会のS先生、それに家内とむすめも、最近は従業員までもが、泥臭い労働に参加してくれるようになった。

現在進行中であるが、これまでの作業を、振り返ってみた。

①場所選び

小さな溪流と平行している小径を約10分歩くと山林の取りつきに辿り着く。平坦なので汗はあまりかかずに済む。入口には目印のため“臨時休診”の白い札を掲げてある。当初は、楽に辿り着けるところを、手ごろな木が多いことを考えてこの付近に小屋を建てることを考えていた。しかし、日当たり、風通し、景色のことも念頭に置いて、ここより約60メートル登った中腹に変更した。

②径作り

取りつきから小屋建築予定地までは、3年前の台風の爪痕が残っている。

至る所で大木が倒れている。荷物を背負い、両手に荷物を持ち、枝に引っかかりながら倒木の上を越えたり、くぐったりはとても疲れる。年齢、不摂生、柔軟性の低下ゆえか一本の倒木をクリアするだけで汗が噴き出し、息も絶え絶えになる。小屋造りより先に道を整備することの必要性が身に染みた。

その足でチェーンソーを購入して帰る。

13日のジェイソンの姿が脳裏に浮かんでくる。大変な凶器である。ギブスカッターとは訳がちがう。

勿論、これまで使ったことなどない。30P余りある解説書を赤線を引きつつ熟読した。10分以上続けるな・一日2時間を越えるな・酒を飲むな・煙草は吸うな・肘をのばすな・ネクタイするな・梯子に登るな・

人間から2 m以上離れろ・靴に穴があいてはいけな、……とうるさいことうるさいこと！ 約70項目が恐ろしげに書いてある。解説書というより禁止・警告・注意事項集である。

禁止、警告、注意事項を多少とも犯しつつ、通過に少しでも妨げになるものは倒木に限らず切りまくった。その結果、取りつきから小屋予定地までの所要時間はこれまでの3分の1になり、当然、体の疲れも3分の1になった。

③屋根

道具を毎回持って行って、持って帰るのは体に酷であり、ばかげているので、道具と若干の食糧、水をデポすることにした。また、にわか雨をしのぐ必要もあり、一時的な屋根を作ることにした。

屋根は枝切れ同志を交差させ編んでその上に木の葉を載せただけの簡易なものである。手当たり次第に刈り取ってきた木の葉のなかに櫨の葉でも混じっていたのであろう。両上肢露出部の広範囲に皮膚炎が起こる。週末になると鎮静の兆しが見えてくるのにまた月曜日には悲惨な状況に戻るというサイクルを繰り返した。患者から勝手な診断をつけられることもたびたびであった。

さて、屋根は作ったが、面倒くさいので整地は行わなかったので、物が滑っていったり、転がって行ったりしやすいので、食糧は天井から吊るしておいた。

次に来たときにはクラッカーなどはすっかりなくなっていた。ビニールの袋が破られ、そしてアルミの袋も裂かれ……。オイルサーディンの缶詰にはしっかりとした大きな歯型が残っており鹿の仕業であることがわかった。一緒にデポしておいた桃の缶詰のラベルは剥がされず、傷すらついていなかった。不思議な鹿である。

④小屋

太い木であると積み上げは早いが重くて運搬できないし、細い木であるとチマチマ積み上げのための細工に時間がかかってしまう。太すぎる木は小屋造りが進んで行くと積み上げが困難になってゆく。木の太さ、長さ、それに自分達の体力を考慮してまずは2坪強の広さに決定しなければならなかった。

長さ3 mの木を切り出すとして、生木の比重を1と仮定すると、直径10cmで22.5kg、20cmで90kg、30cmになると200kgをゆうにこえてしまう。小屋予定地まで運搬が楽になるように、伐採後は乾燥させて軽くしなければならないのだが、切り倒して尾根までの急な斜面を引っ張り上げるときが最も苦役を強いられることになるので、伐採する木の直径は20cmが上限であるとした。

さて、伐採の作業にはいる。

解説書にあるように生木にウエッジをいれ反対側からさらに切り込むとゆっくりと傾いてゆき次第に速くなり、ミシミシという音からペキペキという音に変わって行く。倒れて行くのを見ていると神妙な気持ちになる。決して“やった！”という気にはならない。次の瞬間には当然地響きをたてて倒れることを予測していたがそうはならなかった。別の木にもたれかかってしまったのである。危険であるが、そのもたれかかっている木の伐採に取りかかる。2本目もまた別の木に寄りかかってしまった。二人の酔っ払いが一人の素面に寄りかかっているような風景になってしまった。

そもそも、木は絵に描いた餅のように倒れてくれないものである。重力の働く方向だけでなく、上の方で受ける風の影響も無視できない。このような応用問題になると難しいだけでなく、危険性も増してくる。したがって、このケースは放棄した。森林の神にお許しを請わねばならない。そもそも伐採は山の麓の方

から進めて行くものではないのか、ごぼうぬきの様な伐採シーンは見たことがないような気がしてきた。

失敗を糧とし、伐採のコツもそれなりに習得し手ごろな大きさの生木を切り出し、皮剥きの操作にはいる。ログハウス造りの本によれば、スクレイパーという道具を用い、短冊上に皮を剥いて行くようなことがちらりと書いてあるが、そんなものがうまく手にはいるわけでもない。木の皮も骨膜もおなじようなものであろうと、道具屋さんでラスパトリウムの親玉のようなものを見つけておいたので試してみると案の定である。面白い程、上手に一枚に剥げる。M君に交代すると、もたついて木の皮を破ってしまったりしずたずたにしてしまう。

自分の手に整形外科医としての財産が残っているのだなあと悦にってしまうのであった。

特に、檜の皮剥ぎは感動ものである。まず、その皮の下の木の色、しっとり潤った滑らかさに感動せずにはいられない。樹液で手はベトベトになり、その香は一瞬にして森全体に広がる。

無垢な少女の服の下で贅肉のない裸体に感動し、放たれる若さ特有の体臭に酔うがごとくである。まさに“森の精”である。

しかし、ものの5分もすると真っ白であった少女の体はかすかに褐色味を帯びてきて、世間ずれを彷彿させる。そして次の週に来たときには、前回の感動をかすかに偲ばせてはくれるが、はかなさといくらかの罪悪感がよぎる。

⑤広場

小屋の隣を約20畳くらい整地した。倒木や雑木から土留めを切り出し、山側の土を崩し低い方へ運び平坦にしていく単純な作業である。土方を見てぐずぐず働いていると思うことが常であったが、やはり餅は餅屋である。彼等はプロである。50才に手が届きだすと、炎天下にスコップで10回も掘込むことなんてとても出来ないことがわかる。スコップ10杯の土も続けて運べないこともわかった。西成ではわれわれのようなおっさんはすぐに解雇されることがわかった。また、すこしのビールは、体力を回復させてはくれないが、疲れを忘れさせてくれることもわかった。

⑥椅子とテーブル

広場ができたので此処に据え付ける椅子とテーブルの制作にかかる。

立ち枯れている木は安定性を重視して、根が植わったままその場で背もたれつきの椅子にカットした。シンプルだが背もたれの木目が美しく、我ながらのセンスに満足する。次々に同じデザインの椅子をカットしていった。松の木は重たい。尻のでかい女性ほど太い木から作った椅子が必要となるが、当の女性には運べない。椅子に乗らないほどのでかい尻の女性には、背もたれのない短く切った丸太の椅子で辛抱していただくしかない。

直径30cm、長さ1m余の丸太を縦切りにしてテーブルの面に用いる。脚をつけると大人2人でも動かせないで、テーブルを乗せる台とに分けることにした。これで、やっと、延べ20日にして人間らしく椅子に座って飲んだり食べたり、雨露も凌げるようになったわけである。

少しだけ、開拓者の喜びがわかる気がした。アメリカの入植時代に思いを馳せて見れば、無論チェーンソーや使い勝手のよい道具なんてものはない。迫り来る冬に備え、食べるものを確保しながら、その合間にノコと斧で小屋を作っていたはずである。大変な覚悟で、難民として彼等は入植したのであろうと偲ばれる。

⑦洞穴掘り

食糧を貯蔵しておいたり、飲み物が冷やせたり、ワインを寝かしたり、なんとかできないものかと約1mの横穴をほってみた。大きなムカデが出てきたりしたが、松茸の根に寄生する菌糸の固まりも出てきた。初めて、目にするものである。

落盤の心配もあるし、あまり温度も低く感じないし、もう少し検討の余地あり。

⑧ハンモック

かつては、命綱として愛用してきたザイルを切断し、あちらこちらにフィックスしておいた。風通しがそこそこで、木陰になったところを選んでハンモックを引っ掛ければよいだけである。腹が膨れ、すこしアルコールが入ったあとは、鳥の歌声を聞きながら、揺れてうたた寝するのは最高である。

⑨電気

電気会社は依頼があれば、どんな山奥にでも無料で電気を引かなければならないと聞いている。冷蔵庫を置けばこれまでのように氷を運ばなくてすむようになるし、オーディオを持ち込んで大好きなフランス語の歌を木々の残響のなかで聞けば素晴らしいはずである。しかし、電信柱を立てることで自然の破壊はあるだろうし、税金もとられるようになるかもしれないので、もう暫く、検討することにした。

⑩今後

森を散策できるように散歩道をつくること。そして、土産を持って帰ることができるように小さな果樹園と畑を作りたい。猪鹿狸に荒されることなく、春夏秋冬のいつにでも何か実っているように……



～僕と唄～

のがみ泉州リハビリテーションクリニック

野 上 倫 昭

(昭和57年入局)

「みなさんこんにちは、ノマーズクワーズです。」2～3曲歌い上げた后、僕はいつもこう挨拶しお喋りをはじめる。少し緊張の糸が緩みお客さんとの距離を確かめて、自分の努力ではどうにもならないノリ具合が決まる瞬間だ。ホールでのライブの場合スポットライトを浴びるとお客さんの顔はせいぜい前の2～3列しか見えず、全体の空気感を掴むために自然と覚えた手順なのだと思う。

ノリの良い日は2時間のライブでも心地良く時は流れるし、体調の不具合な時などはたとえ短いライブでも辛い時がある。(小学生時代に先生に叱られ、見世物的に立たされた気分かな…。)

変な話だがライブを終えるたびに総じて思うことは、「もうこんなしんどい事はやめよう」である。ゆっくり散歩して季節や景色の移り変わりを楽しんだ方が普通の仕事のストレスを考えると良いように思う。ちなみに2時間のライブでの演奏は17～18曲となる。

2ヶ月前には準備に入り、毎日4時間は練習に費やす事になる。仕事の具合によっては午後10時以後に練習している事も多い。本番では「楽しそうで最高ですね」なんて言われても、実は過度の緊張でそんな余裕もなく、震えのため翌日太ももが痛いなんて事もしばしばであった。

それでも音楽を続けてきた理由とは何か？

まずは僕と音楽との出会いから今日への道のりを通じて話したいと思う。初めて覚えた唄は「スーダラ節(クレージーキャッツ)」、そして普通にグループサウンズ(タイガース)が好きになり「モナリザの微笑み」や「花の首飾り」をよく唄っていた。中学生のとき、同級生にギターを弾くやつが一人だけいて、(昭和40年代前期だったので非常に珍しい存在だった。)学生集会か何かの席で拓郎の曲なんか弾き語りしたもんだから、そりゃもう「すごいなあ」って仲間うちではしばらくその話で持ちきりだったのを覚えている。少し時は逆のぼるが、近所のガソリンスタンドの兄ちゃんが太ももの骨を折って父親の診療所に入院したときのことである。小学生の僕はよく彼の病室に通った。彼はエレキギターを持っており、僕は興味津々に彼の演奏に聴き入った。その話を母親にすると、「不良や、エレキは不良になる」と話していたのを覚えている。「エレキは不良」は当時の社会現象的合言葉であるかのようにあちこちで聴かれた。そんな時代だったんだなあ。

高校生になった僕は勉強する様にとクラブ活動もさせてもらえず、その反動で他校の学生とバンド活動を始めてしまったのです。

当時の日本の音楽シーンと言え、概ね今と大して変わらないが、城みちるの「イルカに乗った少年」なんぞがそれなりにヒットした時代で、僕は洋楽ばかり聴いていた。(p.s.当時、城みちると恋愛関係にあった伊藤咲子の乙^{おとめ}のワルツは好きでした…エライスママセン)。

バンドの話に戻るが、自分としてはハヤリモノ「レイラ」(デレクエンドドミノス)等をしたかったのですが、ベースという地味なパートをしていたため？か却下、純然たるブルースやロックンロールを演奏していた。

当時こんな趣向の高校生バンドはまず存在しなかったと記憶しているが、ラジオに出演したり、鈴木ヒ

ロミツさんのバンド（モップス）の前座を務めさせていただいたのは良い経験だったと思う。当時のメンバーで音楽以外の仕事で飯を喰っているのは僕だけのようです。

大学時代は音楽から少し離れ、（オーディションは一人で何度か受けたがダメだった。）1年間アメリカンフットボールと重複したものの、6年間バレーボールを続けた。アルバイトもがんばった。トンカツ屋のウェ이터・家庭教師・土方・その他、人に言えないアルバイトまでいろいろ経験した。（興味のある方は個人的にお聞きください。）

そうして、いろんな仕込みやルウをベースに、社会にとって恐ろしいかな、医者として社会人デビューする事となり、今でもいろいろな先生方、職員の方、あげくの果てには患者さんにまでお世話になり続け今日に至っている。

初任給で買ったもの…シンセサイザー…これにて曲を書きはじめた。そのためいろんな方が、披露宴の席で迷惑を被る事になる。これをお読みいただいている方の中にも多数おられるかと思う。

トシも40を過ぎ、ますます地位や名誉やお金や力には否定的になり、何か心に残る大切な物を足跡として残したいと考えていたある日の事だった。仕事を終えよく行く近所のたこ焼き屋で一杯ひっかけながら店のおやじのリクエストでキーボードの弾き語りをやったらえらい受けて唄入りテープを差しあげた。ひと月程たったある日、「オーディション予選通過したからな」とおやじは言った。後で知ったが、おやじは「えびす企画」という怪し気なイベント会社もやっているとの事だった。それで大阪フィルのソプラノやってた女性とデュエットで大会にでる事になった。だが、さすがに世の中甘かねえ。

彼の意見もあり、キーボードではステージでのパフォーマンス性に欠けるとの事でギターを持ち唄う事となった。呑んだ上での話なので、話は大きくなり勝手に前へすすめられた。とはいえ、ギターも弾けないので、近所のスーパーにあるギター教室に通う事になった。41才の9月の事であった。無謀にも、3カ月後には、泉州では最高とされるホールでのジョイントライブでプロの前座する事が勝手に決められていた。しかし、火事場の馬鹿力というか、まだ若かったおかげというか、僕にとって歴史的なライブは極度の緊張の中無事終わった。

その翌年には、某楽器メーカー主催のコンテストで関西地区の決勝大会に進み優勝した。

昨年も久しぶりに某コンテストで入賞し、2週間に渡りテレビにも出演させていただいた。ここでちょっとティーブレイクとしよう。

～あるコンテスト・ライブハウス楽屋での光景～

大体こんな処におっさんがいること自体が変である。よくいって25才ぐらいまでの連中で大抵は10代である。そんな中、あるバンドの連中に声をかけられ、少しい気になって話し込んだ後、うちの父さんにしてやりたいなどと言われ、（そいつのオヤジは僕より若いらしい。）ふと異次元空間にいる自分に気付いたりもする。若い頃にやりきれず、今ならまだひょっとして間にあうかもしれないと、歯を食いしばりガンバル自分がある。「本当に楽しみながらできてるの？」って自分に問いかけてみたりもする。

ただトシを喰い、オヤジの感性に成り果てたつもりはないにしろ、今も謳歌する若人の中においては、風に揺れる壮大なる菜の花畑に一人自分がある様に思える事もある。唄には渾身の自分、気の抜けた自分のどちらもが束の間を尽くせる様ガンバル他はない。

しかし選ぶ側にも問題はあると思う、中高生やヒップな大人にターゲットを絞り、新しい形態を創作したかのように装い続け、本質を見失っているのであろう。

ノマーズクワーズは今45才。メジャーには届かなかった？が、それなりに自己満足に終わる事なく音楽

ができてよかったと思う。まさしく応援していただいた方のおかげだと思う。

実は去年唄いすぎたためか、唄うはおろか、喋る事も難しくなってしまった。手術をしていただき、少し疲れるが喋れるようになり仕事は出来る。唄はハイトーンが出なくなって少し音痴になったかな。25年間吸い続けたタバコをやめたのは、もう一度唄えるようになりたいって思ったから。

最近はまだこれでおしまいかなと思いながらライブに臨んでいる。人数こそわずかではあるがファンの方の「ヤメチャダメデス。」なんて、大きな支えをいただきガンバッテイル。

今年はいいいライブを2本させていただいた。

1本は貝塚コスモシアターで「わすれもの」を唄った時の事だった。最前列のお客さんの何人かに涙しながら聴いていただき、僕の胸も熱くなった時の事。最後の曲、「サンライズ」では、皆さんに大きな手拍子をいただき会場全体が元気の交換会みたいで最高だったなあ。(会場の手拍子の中には歌う娘の姿があった。)

もう1本は、バラ園開催中の中の島での野外ライブの時だった。トップバッターでの出演だったが、道ゆく人が1人また1人と足を止めていただき、終了時には、こんなにたくさんの人に聴いていただけたのかと思うと、そりゃもう感激だった。ステージを降り、娘とバラ園内を駆け巡った。水面の光・揺れてキラメク木々の緑・あざやかなバラ達…、息をきらして大の字になると、ビルの谷間には信じられないようなでっかいブルーが広がっていた。2002年の初夏だった。

最後に…。今後の僕について。

正直なところ、本業の方が忙しすぎるのか？ 音楽活動に疲れたのか？ 良い作品ができなくなったからなのか？ しばらく活動らしい活動は休止しようと考えています。

そうそう、この春にストリートミュージックのメッカといわれる某駅前にこっそり出かけ、始めてストリートというのを経験した。若者もいれば、つまみとビールを片手に唄う50を過ぎたおっちゃんもいた。音楽を楽しむ形態はさまざまなんだし、別に入場料いただいてしている訳でもないし気楽で楽しめるのもいいなあって思った。いろいろと自分なりにガンバッテキタが、楽しくできるということが一番大切なんだって結論です。

最後まで目を通していただきありがとうございました。

お礼に「わすれもの」の歌詞を掲載させていただきます。何時か何処かで、聴いていただける日を楽しみにしています。

ノマーズ・クワーズ

(野上 倫昭)

忘れもの

せめて君の人生が 幸せになりますように
そして君の願い事が きっとあの星に届きますように
かわいい二つの影が 永遠によりそい歩けますように
いつか君のホントの笑顔 きっときっと逢えますように

とおさんとかあさんが 買ってくれた祭りの法被
うれしくて隣町まで やぐらを追いかけた

ぬくもりを忘れない あの夕焼けも忘れない
並ぶ屋台は走馬燈 おさない瞳には走馬燈

日が暮れるとキツネが出るぞ 友達のふりしてさらわれるぞ
とおさん かあさん急いで帰るね 心配かけてゴメンネ
お前たちにも 伝えたい とおさんのもらった宝物
大きくなったら 幸せになって とおさんかあさん喜ばせてね

セーターにくっついた ワラを ひとつひとつ取りながら
いったいどこで遊んできたの 遠く枯れた季節の中
畑を焼くかおりさえ 僕は僕は忘れない
朽ちかけた木の下では 春まで枯葉しきつめて

心は 心は 心は 心は
心は 心は 心は 心は

一度きりの人生だから Ahー誰も 傷つけないで
Ahー君の愛する季節 Ahー誰も 奪っちゃいけない

一度きりの人生だから Ahー誰も 傷つけないで

あなたの為にだけ 僕らは唄いつづける
あなたのためにだけ Uh……………



トロムソへの旅

伊藤外科診療所

伊藤 成 幸

(昭和25年入局)

昭和43年6月、勤務医に行きづまりを感じて開業したのが、つい先日のように思えます。市大開業医会（市整会）の発足の数年前です。それから30年余りがたっており、私の開業は市整会とともに歩んできたように思います。開業当初、大きな借金を背負って、一生懸命、昼夜をわかつた、若さもあってよく働いたものです。最近では寄る年なみで仕事の能力がおち借金も少なくなり、仕事よりもゴルフ、カラオケ、旅行等の遊びに情熱をもやすようになってきました。とくに、まだ行ったことのない国々への旅をしたいという思いが強く、今年の夏は、JCOA後援の海外ツアーに参加して、ノルウェーのトロムソに行ってきました。（このツアーは整形外科医だけのグループで非常に気易く、楽しく、皆様も是非参加されたいと思います。来年（2003年）はシカゴ（脊椎外科学会）とアラスカ旅行の予定です。）

私は8月15日、日本を発ちフランクフルト→オスロ→トロムソと飛行機を乗り次いで約18時間かけて、やっとトロムソに到着しました。オスロ～トロムソ間は、全くのローカル線です。飛行機は小さく座席も自由席で、私が乗り込んだ時は、出発間際で、空席は最後尾とその前の2つだけで、妻とそれぞれやっと座れたという状態でした。飛行時間は約2時間ですが、飛行が安定すると同時にここでも機内食が出ました。マカロニのようなものとパンで、味は私ども日本人好みの味で、乗り変えるたびの機内食（四食目）で運動もせず、食べてばかりの満腹状態でしたが、結構いただけました。

トロムソ空港へは、現地時間のPM9:00頃到着しましたが、外は明るく日がさし、いわゆる白夜に近い状態でした。私どもの乗っている飛行機は、着陸して停止すると180°回転して、降りてきた滑走路を逆行して到着口まで行くのも他では見られない光景で、飛行便数が如何に少ないかがうかがえて、北の果てに来たんだなあという思いが頭をよぎりました。空港のロビーは、天井の飾り廊下等は木材がかなり使われ、全体として木の温みを感じさせる近代的な建物です（オスロ空港も同じように木材がふんだんに使われていた）。木の文化とかかわりの深い、私ども日本人には身近な感じの空港でした。

空港から同行のJCOAの先生方ご夫妻（総勢28名）とチャーターされたバスに乗り、20分程でトロムソ市の中心に近いRadisson SAS Hotelに到着いたしました。ラデソンホテルは、トロムソでは最高級ホテルですが、部屋は狭く、ベッドと小テーブルと椅子があり、トランクをあけるスペースがないほどでした。恐らく冬の寒い時期に部屋が小さいほど暖房の効率がよいのではと、善意に解釈して自分なりになっとくしておりました。

トロムソ市は、北緯70°に近く、人口51000人、地球上最北端（北極圏）の都市で、ノルウェー第4の大都市？だそうです。スカンディナビア半島からはなれた小さな島が、トロムソ島で、この島に街の中心がありホテル等も、この島に集中しており、対岸の本州との間はトロムソ大橋（1036m）でつながっています。その本州側にストームスタイン山（標高420m）があり、ロープウェイでほぼ山頂まで登れ、そこから島を見おろす眺めはすばらしいものです。緑の島をバックに、トロムソの街が一望でき、赤い屋根の家々が点在し、まるで絵はがきのような景色です。島と反対側の後の山々には、夏の終わりですが、ところどころに残雪、万年雪が見られ、さすが北極圏と感銘を深くしました。

この地方は、夏と冬だけで、春秋はなく、9月中頃を過ぎると冬に入ります。真冬は、オーロラが天空にかかり、美しいあやしげな光を放つそうです。 Tromsø の街には、4、5ヶ所にオーロラの観測所があり、オーロラの研究が盛んに行われております。夏は白夜で、私が行った8月中頃は、日の入りがpm10時頃で、それまでは太陽がまぶしく、空に輝いており、日中は長袖では暑い位で半袖を着ていて丁度よいという状態です。今年は異常気象でとくに暑かったようです。しかし、朝夕はさすがに涼しく、上衣が必要です。夜、西北の空は、pm11時すぎまで夕焼け空で、そのあともいつまでも明るく、朝は早くから東の空が白らんできます。深夜、外が明るくても1人歩きは要注意だそうです。ノルウェー人は温厚ですが、南の方から避暑をかねて来ている外国人は、何をやるかわからないということだそうです。

この Tromsø には、総合大学と3つの単科大学があります。しかも、学費は国費でまかなわれ、ノルウェーの学生は、めぐまれています。

この文教の街 Tromsø で8月15日～18日まで4日間、第29回スカンディナヴィア・リウマチ学会が開かれました。8月15日の初日の開会式には、国王のご臨席もあり、ノルウェーとしては、かなり力を入れた学会のようでした。私どもは、到着の翌日、16日に学会の登録をすまして、参加しました。会場は、Tromsø の郊外のコンファレンスセンターで、約1000人程の参加者が講演会場、学術展示会場、薬品、機械等の展示会場等にあふれておりました。日本からは岩手医大から出題されており、演者の吉田昌明講師にお会いしました。同行のJCOA理事の双木先生は岩手医大整形外科の同窓会長をしておられて、偶然の出会いで、吉田先生を囲んで話に花がさき、当リウマチ学会の情勢や、先生の発表内容等についておうかがいし、楽しいひと時をおくることができました。

学会は、AM8:30～PM5:30までで昼の休憩も余りなく、密度の濃い学会でした。基礎的なものが多く、純粹の臨床的なものは少ないように見受けられました。この学会の詳細はJCOA会報に掲載される予定です。

私は、学会への参加、勉強はほどほどにして Tromsø 市内や郊外に観光にでかけ、日頃のストレスから開放され、身心ともにリフレッシュして参りました。



学会会場にて



リウマチ学会会場にて
右側より岩手大の吉田昌明先生、
JCOA理事双木先生、ドイツの
医師で吉田先生の友人、そして私



JCOAの同行の先生方
学会会場前にて、後方の山には
万年雪が見られる



トロムソ港
西（右）の方の空があかるい。
東（左）の方から太陽の光がさ
しはじめています。（半白夜）



JCOAの同行の先生方 トロムソ島にて
後方にトロムソ橋。対岸は、ノルウェー本州



ラデソンホテルのすぐ近くにアムンゼンの銅像がある。
このトロムソを基地として北極探検をした。
その功績をたたえて立てられている。

私の歩行研究

(株)東鉢伏ユースランド

坂 本 和 英

(昭和26年入局)

大阪市立大学整形外科開業医会30周年記念誌発刊、おめでとうございます。

私の歩行研究は、私が卒業した京城帝国大学は既に消滅し、戦後の恩師、国立相模が原病院長、元城大外科教授本名文任先生に始まり、大阪市立大学の解剖学教授鈴木清先生と、島五郎先生、同じく整形外科教授水野祥太郎先生のご指導で、引き続き、続けられました。

私は、大阪市立大学にお世話になる数年前より、相模が原国立病院長本名文任先生のご指導で、文部省と厚生省の研究費をいただき、こつこつと孤独ながら独自の研究を続けてきました。

大阪で、豪快な鈴木清先生、島五郎先生、続いて水野祥太郎先生に拾われるまで、格好良く言えば、独自の、現実にはまさにひとりぼっちの孤独な戦いでした。

その昔登山に明け暮れていた私が、選りによって、戦争で右脚を奪われ、「生還されるとは、皮肉なものだ」などと言うことは、贅沢きわまりない、許されまい、と納得したが・・・さて当てがわれた義足の理論的または技術的な貧しさには、先進国日本の誇りは何処にあるのかと、まさに呆れてしまった。戦争中に、日本の戦車が紙くずのように役に立たなかったのを思い出した。

あれは義足という代物ではない、鉄とアルミの櫓で支えただけである。一本の棒切れと何ら変わらない。まさに憤然としたが、たまたま在籍していた国立病院院長本名文任先生から、義足の研究開発をやらなかつたかという有り難い指名を頂いた。厚生省と文部省から幾ばくかの研究費が届くという前触れだったが、現実には「幾ばく」などと言うにはもったいない高額の研究費であった。

そのときの病院長は、母校の外科教授で、私の学生時代の悪名をよく覚えてくださり、何とも有り難い幸運であった。私は之に飛びついた。

私は大学卒業時に、終生の課題として人類学を志すことにしていた。とても敗戦の憂いき目ではそのチャンスはまず回ってこない諦めていたのだが、「義足の研究には、歩行の研究が必要である・・・歩行の研究は人類学にもっとも基礎的である。」有り難いことだ、之はズバリ私の本筋の課題であると勝手に結論づけて・・・当然のごとく私は飛びついた。私はこの幸運に感激し、うきうきと研究室創設に飛び乗った。敗戦当時はものに困窮していて何もなくて、リヤカーでがらくたと文献を、いただいた空き病棟にかき集め、たまたま隣にあった、アメリカ陸軍病院付属図書館のあらゆる文献の閲覧許可を貰い、さらに5年以上前のものは持ち帰ってもよいという許可まで頂き、そのコピーと現物を我が病院に持ち帰り、抄読会で公開した。

かくしてせっせと自称歩行（実名は義肢）研究室創設に文字とおり独りで馬力をかけた。

私の分野はもちろんのこと、日本にはまだ公開されていない驚くべきアメリカの研究成果をコピーしまくり我が病院に公開した。当時の日本人はまさしく新しい知見に飢えていた。元大学教授の院長先生まで、「君その文献は何処で見たかと」問いかけられたのには驚いた。

とにかく戦争で研究どころではなかった当時の日本の実情である。

私の歩行研究は、コンピューターのない当時、手回し計算機のみが頼りで、そのデーター処理に悪戦苦

闘した。

その後大阪市大の助手職にありついたが、美人助手との二人での数字との悪戦苦闘は少しも変わらなかった。

私の歩行研究の方向は、既に多くの東西の先輩が築いた「歩行の基本パターン」を乗り越えて、一人一人に社会的個体機能がある・・・それを社会集団として理論づけなければ駄目だ・・・と言うことになった。

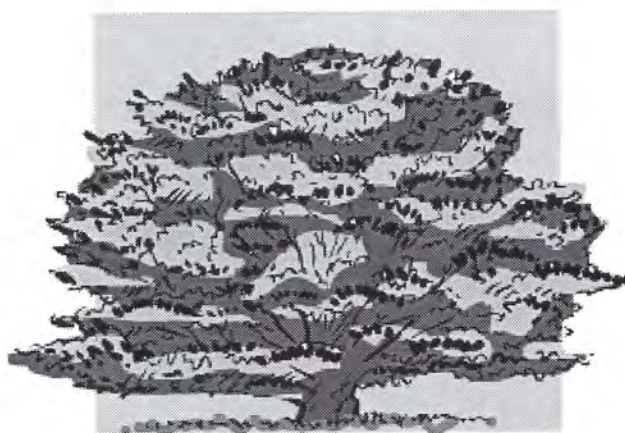
つまり「集団の理論」であるが、残念ながら、之は当時から今日に至るまで、誰も納得していない。受け入れない。

之は人類学が一人の人間に止まらず、集団または民族像の中でしか理解出来ないことと同じ理論だが、今日の生理学はそこまでは展開されていない。つまり集団生理学は成立しなかった。

之は既に生物学では、立派な集団的理論付けがあるにもかかわらず、人類の場合は之を意識的または思想的に外しているという大きな不満が私にはあった・・・勿論今もそうであるのだが。

私の歩行研究の第一歩はそこに決まったが、学会では、今も当時も、この方向は認めていない。かくして、私の研究の第一歩で、「一人の個性が認められた」ことであるが、之は、同時に集団の概念を認めたも同然であるが、そのロジックは人間の自尊心が許さないらしい・・・今も認めたくないらしい・・・まさに滑稽である。

処で、もしも大阪市大の整形外科で私の持論に納得できる方があれば、私と共同研究で結構だから、是非今からでも進めてみたいと願うのだからどうか。



航海記（船医として）

宮内整形外科

宮内 貴

（昭和31年入局）

古い昔話。48年前の話で恐縮です。昭和31年3月インターン（当時）を修了、国試、入局、国試合格発表、8月中旬医師免許授与の予定であった。

7月初旬、教室の先輩市川宣恭先生が、6カ月の船医航海を終えて神戸港に寄港された。次の出港までに船医の後任を探さなければ自分は下船できず、また出港しなければならない。そうすれば水野教授に怒られる。すまんけど後任におまえ乗船してくれ、たのむと懇願され、むげに断りもできず、また水野教授が海外学会に出席され留守であったため、これ幸いとお引き受けすることになった。木部功一医局長に恐る恐る、お許しのお願いをしたら、「この忙しい時に、おれは知らん。勝手にさらせ。おっさん（水野教授）が帰ってきたら怒られるのは、わしやがな。わしは知らん」とのお言葉。医局長の日頃の言動から類推して、自分勝手に「行っても、えーで」とのお言葉と解釈して乗船することにしました。また、当時船医の月給は、医者になりたての、ひよこのペーペーでもあごつきで、月4万2000円でした。さらに赤道を越えると割り増しがついた。ちなみに当時の大卒の初任給が7000円程度で、これも乗船を承諾する魅力の一つでもあった。

ところが、船員手帳（パスポートのかわり）をつくるには肝心の医師免許証がない。船会社が厚生省と折衝して登録番号を知り、やっと船員手帳が間に合って乗船できることになった。

当時、外国に出航する貨物船でも船員法（？）で乗組員が46名以上の船では船医の乗船が義務づけられていたが、医師不足で船医募集に苦労していたようです。

陽光丸、4950 t、三光汽船所属の貨物船で、まだ重油ボイラー船でした。医務室と船医室（個室）は隣室で、四畳半位の2室が割り当てられていた。医務室には以前からの引き継ぎで、古い医療器具と古い薬品が申し訳程度に置いてあった。

7月下旬、修理点検が終った兵庫県相生港にて乗船し、門司港にてセメント、トラック、雑貨を満載し、東シナ海を南下。丁度沖縄にて夏台風と正面衝突し奄美諸島のさる島影に投錨し3日間待避。その間船はピッチングとローリングの繰り返し。床に置いたもの、机の上のもの（即ち机や床や壁・棚に固定していないもの）は横揺れ、縦揺れにあわせて、あっちへ行ったり、こっちへ来たりとの運動会で、新米船医殿も例外ではなく、全く翻弄され、3日3晩飲まず食わずの（飲めず食われずの）生き地獄で、自室で寝てるのみでした。4日目の朝、司厨長（調理室長、賄い長）が「ドクターもうそろそろ船に慣れた頃やで、これ食べて元気出しなはれ（関西出身者）」といって、「ぜんざい」と「スイカ」を運んでくれた。起きられないので寝たまま、嫌々ながら食べた。おいしかったこと。全部食べた。不思議なことに、その日の夕方より歩けるようになった。そして食べれるようになった。その後2～3日で陸上と変わらない生活ができるようになった。

台湾の基隆港（チールン）、高雄港（カオシュン）、香港（ホンコン）、バンコクと寄港し、積荷を降ろし、新たにバンコクにて、タイ米を約6000 t 積み込み帰路についた。

なかでも台湾は、当時上陸して自由行動しても、日本語が通用して治安もよく、楽しい寄港地でした。なかでも日本語の月刊誌、週刊誌が数十倍の値で売れるのにはびっくりしました。古手の船員は慣れたもので、よろしくやりました。

航海中の私の船医としての仕事は、胃炎、腸炎、感冒などの薬処方と小外傷創の処置ぐらいのもので、殆ど仕事がない。外科医らしき仕事は一人だけ指の創縫合をただけでした。

する仕事がないので時間つぶしと、孤独解消には苦勞させられました。ブリッジ（船橋）に上がって、邪魔にならないように舵取り、天体観測の実習、海図の読み方など習ったり、雑談したり。また機関室を見学、無線局を訪ねたり。調理室で料理の手伝いしたり。ある日は船と並行して泳ぐイルカの大群を見たり、鯨の潮吹きを見たり、道具を借りて魚釣りしたりと、いろいろ試みました。

川崎港に入港して、タイ米を降ろしたのですが、日本の陸地がなつかしく、大変うれしかったのですが、5～6分後、気分が悪くなり、陸地が上下動して、船酔いならぬ陸酔いになりました。ベテラン船員でもよくあることだそうです。

3カ月の乗船契約でしたが、ついに後任船医の手当ができず、私が下船すれば、次に出港できないと船長に泣きつかれ、仕方なしに、あと3カ月の約束で出航することにし、木部医局長には葉書で事後承諾してもらいました。

横浜港にて、セメント、化学肥料を積み、香港、バンコク、シンガポールへの航海となりました。今回はもう、体だけは一人前の船員として快適な船旅です。前航海の経験をもとに、またベテラン船員の入れ知恵で、タオル、ハンカチ、下着、シャツ、靴下など日常雑貨を仕入れ、私物として輸出することにしました。というのは、当時高価で処分できたからです。金銭取引は違反となりますので、物々交換とするのです。果物、飲み物、食事、タクシー代など、数倍・数十倍の高価で取引できました。（もちろんベテラン船員の指導のもとです）

積荷を降ろしたあと、シンガラ港（マレー半島）にて鉄鋼石を満載し、九州の八幡港に寄港し、約束通り下船しました。

途中、バシー海峡（台湾とフィリピンの間）にて台風と遭遇。その近海で第1回南極観測に出航して南下していた宗谷丸が台風で難航していることを無線交信にて知りました。その時ヘリコプターが損壊し、使用不能になった由。

わが陽光丸は台湾の高雄港に避難し無事でした。そこで、水野教授宛の手紙に、許可なしに乗船したことのお詫びと、言い訳を書いて、また台風と宗谷丸のことなどを書きました。帰阪して、まず教授室に挨拶に行ったとき、きつとどなりちらされると覚悟してましたが、「おっ、たいへんだったね。無事でなによりだ。」とねぎらって下さって心外でした。

この航海にて、私なりの多くの感動と悲哀と、ひそかな誇りと、社会勉強を、人生の一齣として経験できたことは、皆様方の御理解のたまものと感謝いたしております。

その水野教授、木部先生、市川先生も今は亡く。陽光丸も廃船、解体され、遠い昔話となりました。

私の住む町

竹村整形外科

竹 村 永

(昭和32年入局)

市整会は創立30周年だそうでおめでとうございます。

創立以来いろいろご努力頂いた先生方に敬意を表すると共に感謝申し上げます。30周年というと1972年創立ということになる。私が開業したのが1970年9月で大阪で開かれた万国博覧会がもう幕を閉じようという頃で、“世界の国からこんにちわ”という三波春夫の歌と共にあわただしかった頃を思い出す。1971年7月1日から、日本医師会が医療制度改悪に反対して保険医総辞退するという騒ぎが約1ヶ月ほど続き、あけても、あけても患者の来ない日が続き、開業して1年もたたずでやっと軌道に乗りかけた時期であったので、私にとってはこの事件は大きな打撃であった。

1972年はどんな年であったのかと歴史事典の事件の見出しを見てみると

1月には横井庄一氏がグアム島から恥ずかしながらと生還し

2月には札幌冬のオリンピックで日本ジャンプ陣が金、銀、銅メダルを独占した。また連合赤軍の浅間山荘占拠事件が1日中テレビで実況されていた。

3月には山陽新幹線が岡山まで延伸され、高松塚古墳で彩色壁画が発見された。

5月には沖縄が返還され、大阪千日前ビル火災が発生、多くの死傷者を出した。

6月には田中角栄氏が列島改造論を発表し

7月、8月には四日市ぜんそく、イタイイタイ病の賠償訴訟で患者側が勝訴

8月のミュンヘンオリンピックでパレスチナゲリラが選手村を襲撃し、国内では森永ヒ素ミルク事件で森永が責任を認めた。

9月 日中国交正常化

10月 中国からパンダが上野動物園にやってきて、多くの人を集めた。

11月 北陸トンネルで急行列車が炎上し、死者30人をだす惨事があり

12月 総選挙で自民党が辛勝、共産党は第三党に躍進した。海外旅行者がこの年はじめて100万人を突破した。

そして、1973年1月より70才以上の老人は医療費が無料となった。

さて、私が開業したのは、それ以前の1965年から住んでいた土地に自宅を改築して診療所を造ったわけで、職住分離ではなく、自宅開業である。それではどうして此处に住む様になったかというと、結婚当初は泉大津市の助松団地のいわゆる2DKに住み、当時はやりの団地族であった。ここからそのころあった東市民病院（現在廃院されたが、大阪城公園の中で、以前の日生球場の前にあった。）や、大学病院へ通勤していた。ある日家内が、堺市の津久野に新しく公団の団地ができ、その周辺を造成して分譲地として売り出すという話を、公団の事務所の人に聞いてきて、堺なら天王寺に通うのに便利だなということで申し込んだ。申し込みの最終日にその人に車に乗せてもらって見て回り、倍率の少ない土地を教えてもらって、そこに申し込んだら運よくあたった。たまたま12メートルの道路に面した土地で、金集めに奔走して、2年以内に家建てねばならない条件付きの土地であったので、団地の住居に毛のはえたような家建て

た。その後いろんな事がありまさかと思っていた開業をその土地ですることになり自分でもびっくりしている。

みんな普通はある程度資金の目安がついてから、土地を手に入れ建物をというのが順序であるが、その逆の人はあまりないのではないかとよく人にいわれた。その頃、周囲にはあまり人家が密集しているわけでもなく、分譲地の一個建ちの家ばかりでこんな所に住む人たちは、あまり病気になるぞと先輩にもいわれ、心配しながらの船出であった。

現在私の住む所は、堀上緑町（ほりあげみどりまちと読むが、間違いなく読んでくれる人は少ない）、土地を買ったときは深井中町であった。以前は大阪府泉北郡深井村で昭和17年、堺市に合併された。津久野町は、昔は泉北郡踞尾村といったそうで、その語源は三つぐらいありはっきりしない。“つくお” “つくのお” “つぐのお” “築尾”、古くは神宮皇后が三韓征伐から帰られ、着いた浜辺の近くで“つくのお”とか、仁徳陵や履中陵が近く、つくもって拝むからとか、いまだにはっきりしていない。いまのJR阪和線の津久野駅は、その周辺に住宅公団が団地を開発し、向丘団地と名付け、新しく上野芝鳳間に駅を造ることになり、向丘駅と決まりかけていたが、土地の人たちが昔、阪和鉄道といった時代に村の真ん中を鉄道用地に差し出したのに、駅が上野芝にとられた恨みもあり、どうしても踞尾駅にして欲しいと掛け合ったが、当用漢字にないという理由で断われそれなら津久野と改名し、町名も津久野町と改められたと言うことである。

この津久野駅からすぐ近くにあるのが向丘第一団地であり、そこから南東に1キロ位はなれて向丘第2団地がある。周囲は里山や谷間があり、ため池が散在し、以前はハイキングコースに指定されていた土地でキツネ、タヌキが出没するような所で、キツネ坂と名付けられた場所もあったぐらいで、当時は堺の北海道ともいわれていたようだ。ため池の一つに濁り池という名の池があったがハイキングコースになったとき、イメージが悪いからという事で、みどり池と改められたそうでこの池の名から堀上緑町という町名が由来しているようだ。なおこのあたりには、阪和鉄道がつくった射撃場があり、さきの大戦中に軍の射撃場として使われ、戦後その鉄砲などがこの池に埋められたという話しである。現在埋め立てられた池のあとは八田寺公園となり、老人のゲートボール場や、子供たちの野球場になっている。

我が家は津久野駅の東南方、1.6キロ、バスで5分の距離にある、1977年開通した泉北高速鉄道の深井駅から、距離的には同じぐらいであるが、こちらからは公的な交通機関はない。津久野駅から泉北2号線が南へ延び、家原大池の交差点で左折すると家原寺の前にでる。ここは行基が、生まれた処として有名である。最近では受験生の祈願の寺として知られている、本堂の壁面や階段、手すりなどいたるところに白墨で学校名や自分の名前を書いていて、落書き寺と呼ばれていた。いまでは寺でハンカチを買いそれに自分の名前や志望校の名を書いてピンで止めるようになっている。シーズンになるとなかなかの賑わいである。

行基は皆さんご存じのとおり、仏法を説くだけでなく、数々の土木工事をおこない、民衆のため後の大衆浴場のようなものまで造った。彼の年譜によれば、生涯の間に造った施設は、架橋6、直道1、池15、溝6、樋3、堀4、布施屋9、寺院道場は畿内だけでも49である。池のうち堺の近くでは、久米田池、狭山池、鶴田池などがある。深井の名のいわれは、現在の深井清水町の宝泉寺近くに、行基の掘った井戸に由来し、そこからはつきせぬ清水がわいていたらしく、清水町の名もこれによるものである。

話は横道にそれたが、家原寺（土地の人はえばらじと読んでいる）700メートル位東に我が家がある。現在その間はほとんど人家で埋まっているが、私が開業した頃はあちこちに空き地があり、また斜め前に

は、大きな丘陵地帯の空き地がありそこから絶えず水が側溝に流れ込んでいた。ずっと昔はこの丘陵地のおくに伝染病の隔離病舎があったそうだと聞いている。転宅した頃は周囲の環境がまだ整ってなく道路も未舗装のところがあり、雨がふるとゴム長靴をはいてバス停まで、送ってもらいそこで靴を履き替えて通勤していた。その頃、家の近くに堺東にある大石外科の分院があり、そこに私の1年先輩で第一外科におられた吉田毅先生がおられ、土地を買う時相談にいったところ、私を車の助手席に乗せ、開発されている周辺を案内してくださり、将来発展し人口もふえるだろうと教えて頂いた。この先生には開業する際にもお世話になり、来年から医師会の入会金も値上がりする予定だから、今の内に入会しておけと勧めていただいた。当時いくらだったのかと医師会史を開いてみると30万円であった。そんなこんなのでテンヤ・ワンヤで住宅を改築して開業した。そしてここまでこれたのも、市整会の諸先輩や後輩の先生方のお陰であり改めて感謝申し上げます。なんかとりとめないことをだらだらと書きましたがこれで責を果たした事にしてください。



当院整形外科創設期の思い出

特別会員 財団法人 沢井病院

沢井 康悦

市整会が発足して、爾来30周年を迎えられ、心よりお慶び申し上げます。私は、昭和34年に第一外科教室（現、大学病院腫瘍外科）に入局し、現在同教室の同窓会員ですが、親友の三好病院の三好宏院長とともに市整会の特別会員に推挙して頂き、特にお役に立つこともないままに、今日まで諸先生方と親しく交流させて頂き、大変光榮に存じております。

当院は、昭和12年現在地に父沢井繁治郎が病院（11床、当時は10床以上を病院と法律で規定）を設立し、昭和23年財団法人に認可され、今日まで約64年が経過致しました。診療科目は、当初外科、内科、耳鼻咽喉科の三科でありましたが、昭和30年代に入り、都市の復興と共に車の激増に伴う交通災害事故や労災事故が徐々に増えてきました。奈良県下では、奈良県立医大病院には整形外科がありましたが、市郡部の民間病院には整形外科の浸透が未だ乏しく、外科医が骨折、腱断裂の手術やギブス等を行っていました。初代理事長は、これを懸念して耳鼻咽喉科の継続を断念し、整形外科の独立専門診療を思い立ったのであります。私は第一外科研究医として勤務していた関係上、理事長に依頼されて、恐る恐る嶋良宗助教授（現和歌山医大名誉教授）と、木下孟医局長（現木下整形外科医院）にご相談申し上げたところ、図らずも当院整形外科創設に向けご尽力、ご助力を賜り、故小谷勉教授の許可を得て関連施設となりました。奈良県下の民間病院に、いち早く整形外科が創設されたことは、誠に的を得た発想でありました。

昭和38年12月、整形外科開設にあたって、初代の医長として久志本弘先生（元中津済生会病院整形外科部長）が常勤医として着任され、指導医として榎原幹雄先生（現エバラ整形外科）が毎木曜日に来院されました。以後、外科と整形外科が明確に区別され、時流に沿った整形外科診療が可能となりました。

しかし、マスコミの整形外科に対する認識は未だ浅く、美容整形と勘違いして来院されることもしばしば見受けられましたが、久志本医長の一年間に亘るご労苦で整形外科も軌道にのりだしました。その後、柿本俊夫医長（現岳友会整形外科）、鈴木隆医長（元十三市民病院長）へと変遷し、この間に整形外科の実績は着実に向上したのであります。奈良市在住であった鈴木医長は、早朝から深夜に至るまで外来、回診、手術に追われ、昭和41年頃には、手術件数の増加と共に、当時としては画期的な人工股関節置換術、人工骨頭置換術、頸椎、腰椎前方固定術等の手術が行われていました。又、早くからノイロメーター等の東洋医学も積極的に取り入れ、患者さん方から好評を得ました。3年有余に及ぶ鈴木医長のご努力で整形外科の基盤が築き上げられましたが、難易度の高い手術には、故豊島助教授、木下講師、故市川講師らを招聘して、優秀な技術を提供して頂き、患者さん方の満足が得られるよう努めました。

鈴木医長の後任をうけて畠中正昭医長（現畠中整形外科）が、昭和43年9月に就任され、2年間に亘る地道な診療によって整形外科も安定しました。その後、故水野教授の弟子でベテランの故広谷巖先生が医長としてご活躍いただきましたが、榎原先生とコンビの手術は、ダイナミックで、しかも確実迅速に終える手際の良さに感嘆したのであります。

昭和46年4月、石崎嘉昭先生（現石崎整形外科）がメルボルン留学より帰国後、医長として就任されました。納得のいくまで患者さんを診察し、説明される先生の診療態度に敬服しましたが、術後の患者さん

を手術室から病室まで自ら抱いて運んでいかれる姿には、ともすれば医師中心になりがちな医療に反省を与え、患者中心でなければならないという教えを身をもって教えて下さったのであります。現在も本院の理事として運営に寄与して頂いています。

以上、創設期10年間で足早に懐古致しましたが、その後の推移についても明確に記録を保存しています。誌面の関係上、今回は割愛させていただきますが、その後も教室の多くの先生方から貴重なご助力、ご支援を賜わり、今日まで38年間脈々として整形外科診療が行われているのであります。感慨無量であり、感謝に堪えないところであります。

私の最大の誇りとするところは、大阪市大整形外科教室（現大学院整形外科）の時代、時代に即応した最先端の技術が、奈良市民はもとより、近郊の県民にまで提供され、多くの方々を救済し続けてきたことにあります。

今日、I CやE B Mが盛んにいわれていますが、これらが古くから決して疎かにされていたものでもなく、説明と同意を得てEvidenceにのっとった技術提供を行ってきたのであります。当時の患者さん方は、今より寧ろ道徳があり、患者と医師の信頼関係も親密であったように思います。

医療は、いつの時代になっても両刃の剣であります。医聖ヒポクラテスがいいましたFirst, Do No Harmのように、患者さん方に危害を与える医療は厳に謹み、Cureを第一と考え、医師が患者に贈ることのできる唯一のものは健康であることを念頭におきつつ、たえず自省しながら安全な医療提供に今後も努めます。

歴代の故小谷教授、島津教授、山野教授が大都市大阪と異なる衛星都市奈良の地域医療にご理解を賜わったことに深甚の敬意を表しますとともに、同窓会、市整会の多くの先生方にご支援して頂いたことに、心から感謝申し上げます。

市整会30周年を契機として、市整会の輪が大きく広がっていくことを念願してやみません。



「癌にして、がんにあらず」のがん保険

江口整形外科外科医院

江 口 享

(昭和36年入局)

市整会創立30周年記念特別号への寄稿にしては、暗い内容だが、皆さんの認識を惹起したい。

私事、今夏、痛飲のあげく、持病の胆石症の発作に見舞われ内科受診。その際の検便（潜血反応陽性）・注腸透視の結果、偶然にも「直腸癌」の診断が下された。

早速、懇意な外科医の処へ入院・手術等の相談に出向いた訳だが、癌の臨床診断は肯定され、色々と説明を受けたものの、最後に「がん保険は、適用されませんヨ」と言われた。

その僅かの期間、癌である自分につき、色々思いをめぐらせ、少々頭の中が真っ白気になりそうなこともあったが、先ず休診のこと、そしてスタッフの経済面の処遇などに関しては、私のがん保険で少しは何かなるだろうという計算が走ったのも事実である。がん保険対象外と知ってからは、「嘘ーっ！」という憤懣やるかたない気持ちが続いている。

早速、がん保険のパンフに目を通したら、次のごとき記載がある。

がん保険の対象疾病は悪性新生物です

当社がん保険の保障対象となる疾病は、約款規定により、厚生省大臣官房統計情報部編「国際疾病分類－腫瘍学」において「悪性新生物」に分類されている疾病（ICD-O分類番号「／3」以上、すなわち上皮外への浸潤（大腸については粘膜下への浸潤）が認められる場合）に限られております。

注）新生物であっても、下記のもの是对象としておりません。

- ・異形成
- ・上皮内新生物…上皮内がん（carcinoma in situ）、ポーエン病、大腸の粘膜内がん（組織学的壁深達度がmのもの）など
- ・境界悪性
- ・前がん病変

私の癌は大腸の粘膜内がんに属し、保険の保障対象外という訳である。

つまり、上皮内新生物…大腸の粘膜内がん、これは新生物であっても「悪性新生物」に分類されていないと解釈される。

では、癌と診断されて、悪性新生物ではない、とはどういうことか？

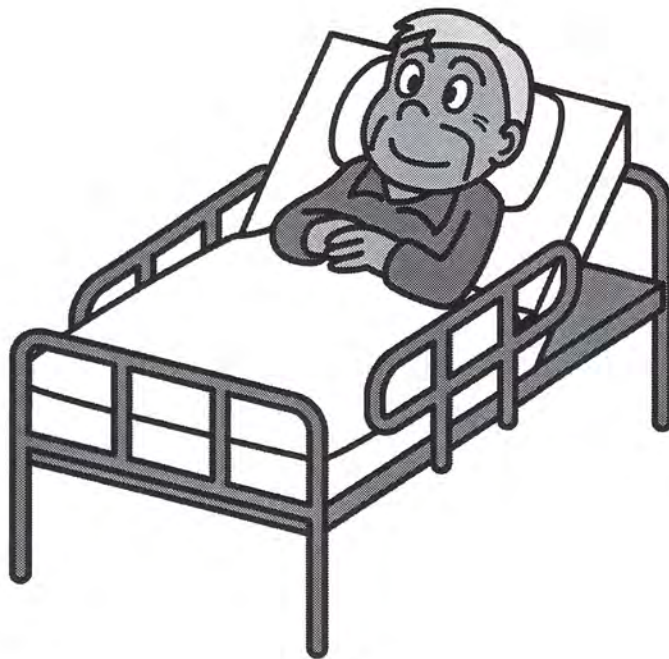
古きを顧みれば、私が医学生の時、病理学実習で「腫瘍学－癌」に関しては、ひときわ絞り上げられた記憶が残っている。現在の腫瘍学は、その後、著しい進歩をみて、考え方の変遷があるのかもしれないが、当時の病理学教授の「癌は癌だ！」と喝破された言葉が、未だ脳裏に焼きついている。

がん保険の契約内容には、がん保険の保障対象とならない癌があるという記載があるのを知らずして、がん保険に加入されている方が、私も含め多数いらっしゃると思われたので、病後に様々の人との巡り合いで問い掛けて来たが、殆どの人が、予想通り、今述べて来た保険内容をご存知ないまま、加入されているという事実が驚きである。

どうぞ、各自もう一度、がん保険の契約内容を読み返して欲しい。

要するに、がん保険の内容から推して、保険対象となる場合は、進行期の癌、又は治療に難渋性の癌であり、対象となる人とそれ自体、その予後の晴雲を示唆するものとして、不幸なことに相違ない。

私は、癌の早期発見・早期治療により、元気な姿で、市整会創立30周年記念祝賀会に出席出来て、“元気に生きていて良かった！！”ことを実感している次第である。



『M』へ

中村整形外科クリニック

中 村 英 健

(昭和44年入局)

赤トンボが舞い秋の気配のする頃となりました。夏の暑さをことさらに感じる様になり、馬齢を重ねた日々を思い知らされる毎日です。

盆休みに例の如く濟州島へやってきました。亡父や一族、家人の先祖の墓地を巡り、長男としての義務を果たして母の住む家に戻ってきました。夕暮れを待ち兼ねるように本日最初の一杯を始めたところです。

グラスの中で鳴る氷を揺らしていたら、何故か北の国や遥か昔の君との凝縮された日々が頭をよぎりました。君の顔はもう思い出せない。17才の別離から夫々が異なった環境で過ごしてきたのだから、現在の状態は想像もできないのです。ハゲなのか、デブなのか、それとも私のようにシラガの髭ジジイに成り果てているのか、出逢っても分からないでしょう。とても楽しみです。

いいかげんで、ぐうたらな私と違って君は優秀だったし物事を真っ直ぐ受けとめて、真剣に考えていました。あの頃、1959～60年は日本中が安保闘争で揺れ動く毎日でした。高校生の私達ですら、成すべきことを探していたのでした。秋の演劇祭に大阪朝鮮高校の舞踊団を招待しようという私達の提案を学校当局に拒否されて、全校を巻き込んでの大論争が起こり、熱い日々が続きました。しかし、結局は大人達にしてやられたのです。

2002年の今、思い返してみればそれは先鋭すぎる企画だったのかもしれない。若かったと言ってしまうとそれまでだが、その後君は実にあっさりと、この日本を捨て、親も捨て新しい国作りに志願して行ってしまったのでした。私達は共に在日2世としてこの国に生をうけ、それなりの苦労はあっても、決して未来がなかった訳ではなかった。そして君は行き、私は残った。『お互い医師になれば、世界のどこかで逢うこともあるだろう』という言葉だけが脳の片隅で浮かんでいる。

あの日君が新潟港から出発する事を私は誰にも告げず、沈黙を守りました。約束だから。そして心のシャッターをおろしたのです。20才で父を亡くし、その鍵も錆びるにまかせてその後の日々を、ただ己の日常に埋没するかのように過ごしてきました。

今夕、94才になった母を見ていて君の御両親が出港前に大切な息子と対面できたのかと考えて、今更ながら胸が疼きました。しょっぱい水割りになってしまいました。

生きてさえいれば、いつか会うこともある、そんな世の中がくればいいなと想いながら、毎日ただただ酒を飲む日々です。この春から酒量が格段に増えました。4月に医療保険制度が改悪されてから、我が家の経済も日本の株価と同じ最低レベルに落ち込んでいます。今のところは、家人の「アメとムチ」でかろうじて働いていますが、いつまでもつのか保証のかぎりではありません。己の無力というか、虚しさを噛み締めています。

ちなみに、酒場で私のカラオケの定番は、「北へ」という唄です。今度逢えたら教えてあげましょう。

では、いつか、

2002年 8 月15日

濟州島にて

追伸

この手紙をワープロに移していたら、驚くようなNEWSが入ってきました。日本の首相の訪朝が決まったそうです。あれから随分の時が流れてゆきました。これから、どういう事が始まりどんな風が吹くのでしょうか。

ついでながら、濟州島での暴飲暴食と炎天下のGOLFが祟り、BLACK' OUTに見舞われました。以後体調不良が続き、現在は家人の命令で禁酒中であります。無期限ではないと思うのですが、とりあえず世の中で2番目に怖い人の指示ですから、当分の間おとなしくしているつもりです。

エッ？ 一番怖いのは誰かって？

それはあなた、当然患者様でございます。

はい。

草々

2002年9月1日



誠に『男』は情けない

医) 永広会 島田病院

島田 永和

(昭和54年入局)

娘を嫁に出す話が聞こえるようになった中年男は、ますます異様なほどのエネルギーを見せる女房殿を横目で見ながら、こう呟くのである。

若いときは、「男たるもの、渾身の力を出せば何とかなる」と考え、その通り結構結果もついてくるものだ。しかし、そんな自信は見事に消え去ることになる。こうした変化は、徐々に来るはずだが、自覚できないのが普通である。ある瞬間に気付くのだ。したがって、本人にとっては、突然訪れたかのように感じる。それで、愕然とする。

そうすると、敵に立ち向かうには、頭を使うことだと、力勝負を避ける自分となる。武蔵丸に勝ったときの貴乃花みたいな顔はできるわけがない。第一、武蔵丸みたいな人と相まみえるのは願い下げである。男子厨房に入って、上手に野菜を刻み「あら、パパ、うまいじゃない」と娘に褒められ、目尻を下げるのが関の山である。考えてみると、別に、年を重ねたせいとばかりは言えない気がする。実はもともと、そうだったのか！？

いつしか、家の模様替え、大きな荷物の運搬は息子の仕事となった。作業の最中は、急な用事を作り外出か、息づかいをひそめて静かに部屋に閉じこもる。家中が自分に期待していないことがひしひしと分かる。それはそれで、長い時間をかけてなかなかの立場を築き上げたと自負する一方、昔からそうだったような記憶もある。それでいて、誰もまったく期待せず、声もかけない事態に多少の寂しさを感じるデリケートな面も残っている。ただ、それを口に出せば、「何いってるの、ただ勝手なだけじゃない」と言われるに決まっている。誠にやっかいな中年親父である。

こんな記事を読んだ。ガン告知の話である。日本では、ガンと診断した場合、医師は家族にまずその事実を告げることが通例である。しかる後に、本人に告げるかどうかを確認される。男がガンの場合、女房殿がまずその情報を手にするのである。多くの女性（7割と記憶する）はその事実を「夫」に告げないように要請するという。「あの人にガンだなんて言えば、おかしくなっちゃうに違いない。」長年一緒に暮らした妻の夫に対する人物評価は厳しい。いや、優しい？ しかし、そのご当人がガンになった時には、真実を告げて欲しいと希望する人がやはり7割程度いる。

一方、女房がガンだといわれた亭主は過半数が、熟考のあげく（ただ迷っているのか）、本人に告げて欲しいと依頼するらしい。その理由が情けない。自分だけにその事実をしまい込む自信がないからだそうだ。どうだろうか、この調査結果。

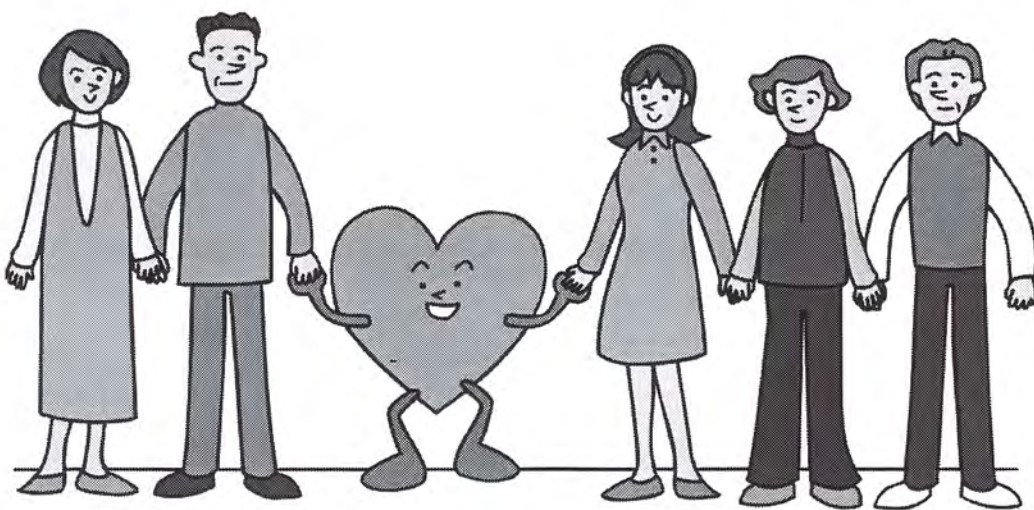
診療現場で治療方針の選択を、ご本人やご家族と一緒に行うことがある。われわれ整形外科医は、悪性疾患にはあまり縁がないが、たとえば、椎間板ヘルニアでの硬膜外ブロックや手術の話ではこうした状況となる。女房に付き添われた患者である中年親父は、説明をひとしきり聞き、医師に「どうしましょうか？」と尋ねられても、即答することは、まず、ない。自分で方針を決める人はきわめて稀である。ほとんどの方が、「どうしょ？」と傍らに威風堂々と立つ女房殿にお伺いを立てるのである。見ていて、痛々しくなったり、おかしくなったりする光景である。普段の日常生活が伺える瞬間でもある。こうした現場に立ち会

うと、先の調査結果はよく理解できる。「家内での大切なことは亭主ではなく、女房が決める。」のがルールなのだ。

私は、女房に尋ねた。「俺がガンになったら、お前、どうするねん?」「保険の種類見直すわ」が彼女の返事である。真実を告げるかどうかという、私の高邁な質問は、自分たちの生活へといとも簡単にシフトしてしまった。苦笑いを浮かべて、私はもう一つ質問を追加した。「もし、あんたがガンになったら、おれはどうしたええ?」「最初から、担当の先生には、私にはホントのこと言うように頼んどくから、あんたはそんなこと心配せんでええの」

私は、彼女にとって一番最初で、また、一番手のかかる子供であり続けるしかないようだ。

誠に、男は情けない。



開業録（2年）

（医）佐藤整形外科クリニック

佐藤 哲也

（昭和54年入局）

ホテルにて整形外科を開業して早2年経ちました。おかげさまで診療所も大はやりでありがたいことだと感謝しています。開業前は人けのないホテルに患者のこない薬局がスタッフ3、4人で寂しくありましたが、今や昼のレストランは満員であり薬局もスタッフが25人以上となりにぎやかなビルに変身しています。周りにあるスーパーマーケットも佐藤整形外科のおかげと感謝されています。患者も通院に定期を買ったり、当院の近くに引っ越して来たり、順番取りも大変です。しかし、こちらの体の方はくたくたで休みの日にはゴルフなど体を動かす気にならず横になってゴロゴロしています。

当院には注射待ち時間3時間というのにがまん強く待ってくれる患者がたくさん来られます。私は十三市民病院、弘済院付属病院を通じてブロック注射や関節内注射が大好きで、まず注射で痛みをとってあげる治療をモットーにしてきました。そのおかげで右手の拇指IP、MP、CM関節炎を併発し注射ができなくなりました。もともと握力もなく指も短い手であったため当然の結果だったと思っています。この事態を克服するため試行錯誤の上、弱い力で注射できる自分用のプロテクターを作りました。今はこのプロテクターがなければ注射ができません。それでも中指には注射タコができています。注射のしすぎで指にタコができた医者にはめったにお目にかかれるものではありません。

開業して導入したシステムは、レントゲンフィルムを整理保存するのがたいへんなので、そのフィルムを業者に頼んでスキャナーで読みとりCD-Rにやいてもらうことでした（1枚30円）。こうしておくときに見たいときにすぐ見られ比較もでき便利です。3年たてばフィルムは気持ちよく廃棄できます。開業1年後にはCRを導入し、その機種を選考に当たってはレントゲンフィルムを用紙にコピーして患者にすぐ渡せることを必要条件にしました。各業者競い合って可能なシステムを作ってくれました。そのおかげで液晶モニター（医者用と患者用2台）でレントゲン像を患者に説明した後20秒ぐらいで適当なレントゲン像を1枚のA4のコピー用紙にプリントできるようになりました。コピー用紙は書き込みもでき折りたたんでもって帰るのも便利です。家に帰って家族に説明するのもいいと患者に喜ばれています。腰椎や胸椎の圧迫骨折など患者にもわかりやすく自覚もでき骨粗鬆症の治療にも積極的になってくれています。

骨粗鬆症の治療に関しては弘済院付属病院当時の専門的な知識を生かして行っています。いかにして骨密度を薬剤で上げるかということに関しては骨代謝を測定して薬剤を決めています。開業当初は骨吸収マーカーが全部保険で査定され、それでもめげずに測定していると骨吸収マーカーは査定されなくなりました。つかの間、今度は骨吸収マーカーと骨形成マーカーを同時に測定すると骨形成マーカーが査定されるようになりました。審査会に問い合わせると月を替えて測定すれば認めるという。しかし、骨粗鬆症の治療をするのにあたっては、その時の骨の動態を調べるのが重要であって月を替えれば動態も変化して測定しても意味がない。また、2ヶ月続けて測定すれば他の検査代も多くかかり医療費が高くなる。保険の審査は道理が通らず常識も通用しない（審査委員の先生ゴメンなさい）。それでも必要な検査はしていくつもりです（審査委員の先生お手柔らかにお願いします）。骨粗鬆症の日常生活の工夫については、ホテルのレストランに（医）佐藤整形外科クリニックおすすめメニュー（カルシウムたっぷり定食）を作っ

たり、お年寄りが多く診察の待ち時間長いためコーヒーや紅茶の代わりに抹茶とわらび餅セットを作ってもらったりして患者にカルシウムの食事指導をするよう努力しています。しかし、先日2周年記念に患者に抹茶の割引券を配ったところ、医師会に患者集めをしているとクレームがはいり医師会長からこっぴどくしられました。こちらの誠意を誤解され憤慨しています。真意を理解してもらえることの難しさを痛切に感じました。

院内では従業員の雇用問題や従業員同志のトラブルもいろいろあり、事務長である妻が苦勞して解決してくれましたが、その間に医療ミスで左の耳はまったく聞こえなくなり右の耳も聴力は半分になりました。補聴器もつぶされた耳にあうものは作れないといわれています。忙しさの中で起こってしまったことですが今では治す方法がありません。これからは健康保持や癒しにお金をつぎこまないといけないと実感しています。今は第1、3週の土曜日は休日にしてどちらか1回は溪流露天風呂に夫婦で行くようにしています。

開業当初、研究も続けていくぞと決心して開業しましたが忙しくて思うようにならず2年たちました。しかし、研究データも十分蓄積してきましたので今年からまた研究を再開していきたいと考えています。勤務医の時のような研究のやり方ではなく開業医らしい研究の仕方を模索していきたいと思います。



開業後に興味をもった幾つかの事柄

茶之木整形外科

茶之木 頼彦

(昭和56年入局)

趣味とは、好きでしていること、そのために、お金あるいは時間を費やしていること、継続性があること、の3つの要素を満たす必要があるが、どれくらいのめり込んでいるかは主観的に判断されるものである。私の場合、習い始めて8年になるフラメンコギターは第1の趣味といえる。入門時には、ブレリアスを弾けるようになるのが目標であったが、いつの間にか、少なくともブレリアスを5曲、一度はマスターし、悲しいかな他の曲をやっているうちに弾けなくなってしまった。今年からは楽譜の提供なしに、先生のギターの音に合わせて耳で覚えるレッスンも加わった。フラメンコは、元々、楽譜の存在しない伝承音楽なので、これが伝統に則った教授法といえる。ただ、素人には録音してテープを聞きながら復習することは許されている。楽譜を見て音を確認する事に比べ、直接音を聞いて感で弾くのは、一旦、インプットされれば忘れにくいものだ。おかげで、3曲程、暗譜で演奏できるレパートリーが増えた。あと10曲も覚えれば、いよいよサイタルが開けそうである。下手なりに、サビーカス、ニーニョ・リカルド、パコ・ペーニャ、マローノ・サンルーカール、ラファエロ・リケーニといった巨匠の曲を弾く楽しさは格別だ。私のカリスマ、パコ・デ・ルシアのオリジナル曲を未だ教えてもらっていないのは残念だが、ルンバの名曲「二筋の川」をマスターするのを新たな目標にしようと思う。

開業して4年目頃、小さなクリニックに籠っていると身体が鈍ってしまうと感じて、ジムでマシン相手に筋トレを始めたものの、直ぐに飽きてしまった。暫くして、職場から自転車で行けるとところにテニススクールがあるのを知り、面白そうだからチャレンジすることにした。昼間のクラスのせいか、私以外は主婦と引退老人しかいなくて、初心者には結構入りやすい雰囲気なのは良かったが、昼休みの雑用が増えたのと、テニスをした後、夜診を続ける気力を無くしそうになってきたので、そこを止め、今は、毎週日曜日の早朝、犬の散歩でウォーミングアップしてから、自宅近くのテニススクールで汗を流している。年月が経つにつれて中上級にまで出世し、クラスの中では最も下手な最古参になってしまった。学生時代は坂本和彦MDに山岳部に引きこまれ、硬派な生活を送っていたが、山には板を担いでリフトで登るものと今ではすっかり改心している。高1と中1の子供が二人ともテニス部に入っているのも、いつか家族でダブルスをしてみたいと思う。

他にハマっているのが、50～60年代の女性ジャズボーカルである。数年前に自宅を新築した際、妻の希望で12畳程度のスタジオを作った。二重窓にしなかったので防音機能はしれている。その部屋だけは予算の関係上、半端なRC造りで、壁にはラバーシート、センチュリーボード、吸音合板を重ね、天井を傾斜させているためか狭い割には音響効果はよい。暫く、グランドとアップライトピアノに占拠されていて、部屋の隅でフラメンコギターを掻き鳴らしていたが、長い交渉の末、アップライトを一台処分し、オーディオセットを置かせてもらうことになった。スピーカーはJBLの中級にすぎないけれど、安物のシステムコンボを聞きなれた耳には、結構いい音が出ていると思う。ボーカルのリファレンス用とアルバムを物色していた時、偶然見つけたBilly HolidayのLady in Satinに感動したのが女性ジャズボーカルに興味を持ち始めた契機である。これは、ステレオ録音が始まった頃の作品なので、マスターは決して良い状態では

ないはずだが、デジタル加工技術のおかげで凄く良く仕上がっている。オーディオマニアではなく、音楽そのものが好きで、お気に入りのシンガーの一人に加わったBHのモノラル録音のCDを何枚か聞いたり、他のシンガーがBHの十八番のAll of meをどの様に歌っているかを知りたくてインターネットで検索して情報を収集し、色々聞き比べてみたりした。All of meは、あなたのことが狂うほど好き、だから唇も腕もうばってもいいわ、という内容の、男であれば一生に一度でいいから言われたい激しい恋の歌だが、オランダの歌姫Laura Fygiがボサノバ風にアレンジしてポルトガル語で歌っているのが一押しである。一人静かに歌声に耳を傾けていると、自分のためだけに囁きかけてくれているような錯覚に陥りそうだ。このようにして、気に入った曲を別のシンガーで聞くという作業をしているうちに辿り着いた、現在一番のお気に入りのアルバムがCarmen McRaeのBook of Balladsである。How long has this been going on?を聞くと恋のストーリーが頭に浮かんでてしまう。これは、Audrey HepburnがFunny Face（パリの恋人）の中で歌って有名になった曲である。最初のverseから歌っているのはSarah Vaughanもいるが、CMがベストと思う。楽譜を忠実に演奏しようとするクラシックでさえ、演奏家や指揮者の解釈によって出来映えが随分異なるが、ジャズでは同じ材料とは思えない程の個性が発揮されるのが面白い。これまでクラシックとフラメンコギターを中心に結構な数のCDを集め、枚数が増えるにつれて部屋のスペースに合うようラックを自作してきた。近頃は新たなラックの置き場も無くなってきたのが悩みの種である。

その他の趣味としては…。これはまだ1年も経っていないので、今後も続いているかわからないが、身体がsingle malt Scotch whiskyに依存しかけている。昼休みに阪急百貨店の食料品売り場をうろついたら、Ardbegという聞き慣れないwhiskyが特売で山積みされていた。手ごろな値段だったので買ってみると、これが実に旨い。強烈なピートの香りが口腔内に一気に広がり、最初は辛く、時間が経つにつれて微かに甘味がでてくる不思議な酒だ。これが、single malt whiskyとの初めての出会いだった。今までは貰い物のあまり癖の無いblendedしか知らなかったの、この酒には圧倒された。何冊かの専門書を通して、この酒の知識を深め、single maltの正しい飲み方に従ってneatでちびちびと味わうことを覚えた。また、リカーショップで未知の酒を買う楽しみも加わった。wineは、栓を空けるとその時に飲みきらなくてはならないが、whiskyなら常温でも短期間は置いておける。single malt Scotch whiskyは醸造所数が100箇所程度と少なく、それぞれがはっきりした特徴をもっている所以で好みを探しやすいし、同じ銘柄では味も安定しているように思える。年代ものは、高くて手が出ないが、今のところ、原則的に守備範囲を若いものに限っているの、コストパフォーマンスが良い酒といえる。先日、梅田の某店で84年以来閉鎖されているPort Ellenを見つけた。希少価値以外の特別な評価はないが、1万円以内なので思わず買ってしまった。これで、Islay maltは全部試したことになる。国産のものを飲んでみたが、もう1度買ってみる気はしない。因に、今のところLaphroaig (Islay)、Ledaig (Islands)、Springbank (Campbeltown)、The Glendronach (Speyside) などが私の好みである。

先輩から開業医は一人遊びができないとやられてしまうと聞いていたが、開業して10年になり、しだいに嗜好性がはっきりしてくると、勤務医の時はできなかった、開業医の〈仕事以外の〉生活が自分に実に合っていると思える今日この頃である。

最近つくづく思うこと

医) 有光会サトウ病院

古 瀬 洋 一

(昭和60年入局)

今春プロ野球のストライクゾーンが改定された。昨年よりゾーンが高目に広がったもので、ピッチャーに有利に、バッターに不利な改定であることは衆目の一致するところであった。評論家たちはさらにこの改定が個々の選手にとってどう影響するかを盛んに論じていた。力まかせに勝負する速球派には有利だが、低目を丁寧についてコントロールで勝負する技巧派にはあまり変化はない云々。そんな開幕前にジャイアンツの松井がインタビューに答えて‘ボールやバットが変わるわけじゃない。ピッチャーの投げた球をバットで打つだから、ピッチャーはバッターの打てないところへボールを投げるだけ、バッターは打てる球を見逃さずに打つだけです。なんら変わるわけじゃない。’と言った。彼の現在の活躍はご存知のとおりである。

同じような話をノルディックスキー複合の荻原健二もしている。ジャンプで圧倒的なリードを奪い、悠々と逃げ切る彼の強さに苛立った国際スキー連盟は、ルールを改定し、ジャンプの距離換算レートを引き下げ、距離への点数配分を多くしたのである。荻原は‘遠くへ飛んで不利になるわけじゃない。早く走れるように練習するだけです。’と言い、改定されたルールの下で世界チャンピオンになった。

レギュレーションは時代背景やそれを決定する団体の意向によって常に変化する。一方、変化しない真理もまた存在する。人よりも速い球を投げる、狙ったところへコントロールできる、遠くへ飛ばせる、速く走れる等々が不利益になることはないであろう。

整形外科開業医の多くは改悪されたレギュレーションと闘っているが、中には松井のように‘なんら変わることはない’と悠然とされている御仁もおられるであろう。幸いにも私は開業して間がないことや、不勉強なことから改定前の旧診療報酬体系もよく理解していなかった。したがって旧制度の恩恵も受けていない代わりに、新制度のパンチも喰らわずに済んだ。職場を整理し、診療を行うのが精一杯で、診療報酬上の戦略を立てるに至らなかったのである。

同じ仕事(医療)を行いながら、ちょっとした請求テクニックを知らないばかりに報酬が倍ほど異なるのはおかしいが、これは不勉強のツケである。しかし報酬をみて仕事を決めることは慎みたい。近い将来、大腿骨頸部骨折などの治療は包括化されるであろうが、現在と同じ機種を用いて同じ手術を行う病院がどれだけあるか興味津々である。医療にもスポーツの世界と同じく、不変の真理があるはずである。レギュレーションに合わせて方法論を変えることを非難しないが、少なくとも超一流とは言えないのではないだろうか。

今年から施設基準を満たさない場合、手術点数の減点が行われている。整形外科では人工関節手術などが該当し、基準を満たさないと30%減額される。当院も当然のことながら基準を満たしていない。人工関節の場合、年間50例がカットラインであるから、年間40例位の病院は大変である。1例あたり70,800円の減額(THA、TKAの場合)なので、49例と50例では年間約350万円の差が生じることになる。人工骨頭で十分な頸部骨折に人工関節を使ったり、片側だけで十分なTKA症例に両側置換を行ったりなどということが、日常茶飯事にならないか心配である。あるメーカーが指用の人工関節の宣伝に来て、リウマチ患者

さんの両手のMP関節を全部置換したら1回で10関節ですから、5人すればそれだけで施設基準をクリアしますよと言うのを聞いて呆れてしまった。医療の本質からまったく外れたところで業界は息づいている。

手術点数の減点に関して私のもっとも言いたいことは、手術点数が下がっても患者さんの支払額は安くないということである。人工関節手術では材料費を加えると、10万点を超える。したがって高額医療となり、自己負担金は一律となる。当院を選んでいただければ大病院のように何ヶ月もお待たせすることもないし、ご希望の曜日に手術できるし、しかも料金が安い！と宣伝したい。手術点数30%カットは患者さんの何の利益にもなっていない。この手の話題が大好きなマスコミさえも何も言わないのが不思議である。



開業して1年

豊川整形外科

豊川英樹

(平成1年入局)

1. 夢を捨てないで

市整会が30周年を迎えることになり、喜ばしく思います。開院、市整会入会から1年が経過しました。医者としては半人前、経営者としては知識ゼロの開業でしたが、諸先輩の御指導のおかげで、どうにか頑張っています。医療を取り巻く状況はかなり厳しいですが、自分が理想とする診療所に近づけるよう、開業を決意したときに抱いた夢を捨てないで、一步一步前に進んでゆきたいと思っています。自分が子供のころ、怪我をしたり、歯が痛くなったとき、通院していた医院は決して最寄りのところではなく、評判のいいところ、やさしい先生で痛くない治療をしてくれるといううわさを聞いてそこまで自転車で行っていました。3年後、5年後、自分の診療所がそうなっているように。

2. 市整会の行事に参加して

平成13年10月、南海高野線狭山駅前に開院しましたが、その直前に、多発テロが勃発し、空虚な気持ちのままスタートしたのを覚えています。しかしそれもつかの間、いろいろなことで悩みました。その度に、周りの先生方にお電話し、「先生はどうされていますか」と尋ね、細かく助言していただきました。また、市整会の行事には積極的に参加させていただいていますが、その際、治療や診断に難渋している症例のレントゲンを持っていき、先生方にアドバイスしていただいたり、本当に助かっています。市整会の学術講演会では、日常診療でよく見かける疾患についての講演を聴く機会がよくあり、そのたびに「ああ勉強になるなあ。今日は来てよかった。」と思います。最近では、香月先生の弾発指に対する腱鞘外注射のお話。あれ以来、応用していますが、なぜかよく効くようです。

3. 医局に望むこと

開業資金についてはかなり苦労しました。自己資金が乏しく、多くを銀行などから借りましたが、はっきり言って私のようなやり方は「綱渡りの開業」というべきもので、何かバックアップしてもらえるシステムがあればいいなあと感じます。

私の友人で、某地方大学の耳鼻科に入局し、数年前に開業した者が言っていましたが、その教室では、開業希望を先ず医局に連絡し、医局が開業にふさわしい場所を提供し、開業資金の援助もしてくれるそうです。わが教室では無理でしょうか？

大学・関連病院・開業医間のネットワークがもっと密になればいいなあと思います。「最近、大学ではこういった最新の治療法を行っています。」「このグループでは、現在こういった研究をしています。」とか、「うちの病院では、昨年これだけの手術を行い、特に何とか術は症例も多く、得意にしています。」とか「大阪のこのエリアでは、計10人の先生が開業されており、A先生は運動療法を、B先生は硬膜外ブロックを、C先生は東洋医学を応用してがんばっておられます。」といった情報交換を目的とした会が年に一度あればいいなあと思います。どこで誰が何をしているのか、今以上に知り合えば、患者さんを紹介しあう機会も増え、市大整形の発展につながると思うのですが。

4. ゴルフと医療

ゴルフは13年以上やっていますがなかなかうまくなりません。同じようなことで悩み一人でもがき苦しんでいましたが、最近、ついに、レッスンを受け始めました。「もっと早く受けていればなあ。」と後悔しています。もうすでに悪い癖がついてしまっていて、すぐに修正するのは困難で、いつも同じポイントを指摘されます。でも、自分が目標とすべきスイングがどんなものかが、少し見えてきたような気がしています。それに向かって、あきらめずに練習あるのみです。

医療についても同じだと感じます。「この方法が一番正しい。」と思い込むのではなく、他の先生がもっといいやり方をしているのを知り、それを真似て少しずつ軌道修正していくことが私には必要だと思っています。「開業医としてのいろいろ」をレッスンして下さる魅力的な先生がこの市整会にはたくさんおられ、幸せに思っています。これからもよろしく御願います。



在宅医療への思い

医) 畠中整形外科

畠 中正 昭

(昭和40年入局)

私が在宅医療に興味を持ち出したのは、1975年関西労災病院リハ科に勤務していた頃です。尼崎6保健所での脳卒中リハ事業に携わっていた時、保健婦が寝たきりの人が病院に行けないので、家へ出向き、身体障害手帳を書いてもらえないかと依頼されたのがきっかけです。保健婦と一緒に障害者を訪問すると、環境、家庭状態の悪さに驚きました。1冊の身障手帳でいろんな福祉サービスが受けられることも知りました。又、リハ科入院患者が退院した後、歩けていた人が介助しなければ歩けない状態になっている人が多い事も分かりました。在宅リハの必要性を実感しました。1983年、在宅医療を試みる為、尼崎西南部で開業しました。最初の頃は保健婦と在宅に出向き、身障手帳を書き、私自身が立ち上がり、起き上がりなどの基本動作訓練を行っていました。在宅患者が増えるにつれて、看護婦教育をして、訪問看護をやり始めました。転機になったのは、阪神淡路大震災です。市の環保局からの依頼を受けて、仮設住宅での障害者の訪問相談を保健婦と共に行いました。障害だけでなく環境、経済状態の悪さにもびっくりしました。夏の暑さ、熱中症への予防、冬の寒さ、閉じこもりの予防に走り回りました。自分独りではできないので医者、歯科医師、看護婦、薬剤師、福祉関係者を集め、各仮設住宅で定期的に健康教室を催しました。障害者、弱者が生き延びる努力をしました。被災民、ボランティアの多くの仲間ができました。盆踊り、クリスマス会などをし、被災民が普通の生活に戻れる様、地域で生きていけるようなイベント事業もしました。こういう活動をしている内に、整形外科という狭い領域で閉じこもってはいけなないと思い始め、地域で生きていこう、地域の人達にとっての医療福祉を立ち上げようと、訪問看護ステーション、デイケアを開設しました。障害者だけでなく痴呆症の取り組みのためにグループホームも作りました、3年前です。尼崎市としては第1号です。介護保険が始まってからは利用者の要望に応じて、ヘルパー事業もしています。言語聴覚士による言語療法、嚥下訓練、訪問リハもはじめました。4月の診療報酬改定で整形外科としては大きな打撃を蒙りました。10月からの高齢者1-2割負担でどれだけの患者減になるか想像が付きません。これからは医療だけでは飯が食っていけない時代になりそうです。医療、グループホームのマイナス分を他の部門で補っていく事になりそうです。訪問看護ステーションの立ち上げは難しいですが、デイケア、デイサービスはスペースさえあればできます。ここで少し解説します。デイサービスは医療法人でも開設できます。利用者1人に対して3㎡が必要です。看護師、PT、OTなどの機能訓練指導員が兼務でいますが専任はいりません。利用者を送迎しなければなりませんのでリフト車がいります。介護福祉士、ヘルパーなどの介護職が中心となって、1日を楽しく過ごしてもらい、入浴サービスを提供する、家族の介護負担をなくすることが目的ですから、開設するのに難しい条件はあまりありません。唯、競争が激しいので地域に密着していなければ、生きていくことはできません。デイケアは現在、通所リハと名称が変わり、個別にリハプログラムをたて、1人1人にリハビリをしなければなりませんので、経験を有する看護師、PT、OTが必要になります。施設基準はデイサービスと同じです。入浴サービス、送迎、緊急時の対応、嚥下障害者への対応、障害者の機能アップ、痴呆者の対応など専門職の教育、研修は欠かすことはできません。専門職をきっちり教育すれば、医療よりも経営面からいえば安定した収入が得られ

ます。医療の将来が見えない現在、介護の分野に関心をしめされますことをお勧めしますし、地域住民との交流、地域との結びつき、積極的に地域に入っていく事が望まれます。



今、目指している医療、介護、事業

医) 平田会平田病院

平 田 宗 興

(昭和48年入局)

18年間鹿児島で育ち、18年間大阪で医学を学び、36歳で帰郷し、翌年開業しました。20年近く経た現在でも安泰な経営とは言えません。たまたま産業道路に面し企業群を擁する立地条件で、初めは私の巣立った大阪労災病院のコピーを作ろうと考えました。しかし地方経済は期待したほど盛り上がりず、交通事故を含め災害医療は限定された状態で、専ら勤労者とその家族の健康管理を行ってきました。そして平成7年以降は老人医療にシフトしてきています。平成11年より内科を併設し検診、デイケアにも力を割いています。21世紀、先行き不透明な病院経営ですが、希望を見失わずに前進したいと考えています。最近、医療法人平田会平田病院の理念について考えをまとめました。

理念

患者様の健康と生命を守るため透明かつ明快な医療および病院経営をおこないます。

医療の基本方針

1. 患者様への思いやり
2. 納得のいく説明とプライバシーを尊重した情報提供
3. クリチカルパスを導入し効率のよい医療
4. すべての患者さまに公平な医療
5. 関連医療施設と連携してプライマリーケアを実践
6. 24時間の救急体制
7. 在宅医療を支援

経営の基本方針

1. 誇りとやりがいの持てる職場づくり
2. 時代や地域のニーズに合致した柔軟な経営戦略
3. 常に安定した経営基盤を志向
4. 明快なバランスシートと職員の経営参加
5. チームワーク、ヘッドワーク、フットワーク
6. 21世紀型の医療と福祉の複合体

以上が私の目指している医療の理念です。

現在の病院の概要は標榜科目、整形外科、リウマチ科、リハビリテーション科、内科、循環器科、消化器科です。病床は急性期病棟41床、デイケア2単位、常勤医4名、非常勤医4名、リハビリは施設基準2でPTは7名です。

この理念に則り医療を展開するためにはかなりのエネルギーをそのシステムづくりに割く必要があります。

す。そのためマンパワーが必要です。熱気あふれる人材を渴望しています。1年でもかまいません。お心あたりの方がいましたら、是非ご紹介ください。不躰であつかましいお願いですが、よろしくお願いします。

(医) 平田会 平田病院

891-0141 鹿児島市谷山中央3丁目390-8

phone 099-267-7100

fax 099-284-5692

Email director@hirata.or.jp



ケアマネ受験記

医) 裕雅会有馬外科・整形外科

寺 川 文 彦

(昭和57年入局)

皆さんはIADLという言葉を知っておられるでしょうか？ADL（基本的日常生活動作）は誰でも知っていて当然ですが、私も勉強不足でケアマネ試験を受験するまで、知らなかったのですが、これはinstrumental ADLすなわち手段的日常生活動作（調理、掃除、買い物、服薬状況など）です。これは介護保険において課題分析に関する項目のひとつです。日々作成する主治医意見書、たまに書く訪問看護指示書、患者さんを連れてくるヘルパー、月ごと給料から天引きされる介護保険料などが介護保険制度にふれる機会でした。当然居宅介護支援事業者と居宅サービス事業者の区別など解りませんでした。ところが、聞いてみると同期の玉田先生、柳井先生は既にケアマネの資格をとっておられました。（でもお二人とも事業としては行っていないようです。）また実父が要介護状態Ⅲになり、家族に何一つ説明できない自分が整形外科医としてあまりにも恥ずかしいものであると痛感しました。そこで『五十の手習い』ならぬ『四十の手習い』で受験勉強を久しぶりに始めました。今までには無い強い味方が二つありました。ひとつはinternetでもう一つはIC recorderでした。試験は医師、歯科医師は優遇されていて、保健医療サービス分野の20問は解答免除されています。介護支援分野25問と保健医療サービス分野の福祉サービスの知識15問の計40問を80分で解くものです。そこでIC recorderで録音して、sports gymで運動しながら聞いて暗記しました。またinternetではいろんな情報があり、過去問や模擬テストをdownloadして利用しました。介護保険は第五番目の社会保険といわれます。介護を医療から切り離して医療改革の基礎作りすることが主眼だと言われます。実際我々がケアマネとしてケアプランを計画作成することはなくても、主治医意見書を書く以上やはり責任をもって書くべきだと思います。主治医意見書は要介護を審査・判定する介護認定審査会にて二次判定で用いられるからです。以上とりとめのないことを述べましたがお許してください。先生方の身内または職員の方がケアマネ試験を受験される予定されている方のために次のhome pageを紹介させていただきます。

<http://village.infoweb.ne.jp/~fwik7750/index.htm>

<http://www.pref.osaka.jp/korei/kaigo/index.htm>

診療所における介護保険事業への取り組み

医) ウマノ整形外科クリニック

馬 野 隆 信

(昭和58年入局)

私は昭和58年に大阪市大医学部卒業後、整形外科に入局し、大学院（病理学教室）での基礎研究や関連施設での臨床勤務を経て、平成6年に東住吉区・矢田で開業しました。開業当初より在宅医療も手掛けており、介護保険発足の平成12年より居宅介護支援事業（ケアプラン作成）と訪問介護事業（ヘルパー派遣）（介護支援センターうさぎ：<http://www.kaigo-usagi.com>）を立ち上げましたので、（入院設備を持たない）個人診療所レベルでの介護保険事業参入の経験を報告させていただきます。

■在宅医療について

整形外科の専門外来クリニックを開設したのですが、地域のニーズからも在宅医療に取り組まざるを得ない状況でした。勤務医時代には大腿骨人工骨頭置換術をした患者さんを何とか歩いて退院させても、その後、家でどのように生活できるのか、家族がいない方はどう暮らしていくのかといったことまでは正直申しまして全く考えにも及びませんでした。しかしながら、開業後、そういった在宅での生活の質の確保やリハビリの重要性、住宅環境整備の必要性を改めて直視させられ、介護との連携の必要性を実感した次第です。

在宅での診療に伴う訪問リハビリ（PT）や訪問看護は開業当初から行って参りました。又、医院の電話は転送にて24時間体制で受けており、時間外でも対応可能としております（実際に深夜に対応が必要なことは希ですが、急変に備え常に連絡が付くという安心感と、24時間連携体制にて地域の救急病院との病診連携が必要不可欠となっております）。家庭撮影用のレントゲン撮影装置は在宅医療では重宝しており、機器の運搬は面倒ですが、CR処理すれば画像も診断に耐え得るものです。

むろん在宅での医療には内科を始めとした総合診療科的な管理も重要な課題でした。最近では内科的疾患も診断・治療指針が整っているものが多く、KKD（経験・勘・度胸）の医療の時代から、EBMの医療の時代に突入しております。リスク管理を重要視し、診診連携や病診連携をとりながら診断・治療に取り組めば、内科的専門医療の経験の乏しい私でも、「かかりつけ医」としての役割を少しでも担えるのではと頑張っております。

■介護保険事業参入について

平成11年、第一回のケアマネージャーの試験を受けたときには介護事業参入は全く考えていませんでした。しかしケアマネの研修を受けている時、これは自分で「介護」に関わらざるを得ないと思う出来事に出会いました。一つのケースを他職種のケアマネ合格者と話し合った時、介護職出身者の独特の思考と想像以上の医療に対しての無知さを思い知らされました。身体に疾病があれば、我々は機能回復に近づけることによりADLやQOLを向上させようとしします。しかし、その能力の無い介護職出身のケアマネは医療抜きで解決させようとしてしまうのです。例えば、膝に痛みがあるため転倒の危険がある患者に対してのプランを「転倒しないように車椅子対応の家に改造し車椅子で生活させる」という風に、我々とは方向

の異なるノーマライゼーションにたどり着くわけです。これでは、自分の患者様が皆車椅子にくくりつけられた生活をさせられるのではないか、自分の患者様だけでも自分が信じる方法で守ってやりたい、そういう思いがきっかけでした。当院が関わらせて頂いている患者様に、外来や在宅で療養を続ける上で出来るだけ迅速かつ適切に動けるチームを造りたいというコンセプトの基に訪問介護と居宅介護事業所を立ち上げた次第です。又、自院で出来ない様なリハビリも提供すべく平成15年3月、クリニック近くにデイサービス事業所を開設予定です。

■在宅医療と介護保険との関わり

介護事業とネットワークを組むようになり、在宅医療のケアに厚みが増しました。今までなら褥創の処置しかできなかった患者様にエアマットなどの福祉用具の手配、ヘルパーによる体位変換、高蛋白の食事摂取の指導と実施、寝具の清潔維持と交換などが可能となります。一方が寝たきりになってしまった老老介護の家庭なども、今までは不必要と思いがながらも入院以外に方法がありませんでしたが、介護が組み込まれることにより在宅での生活が可能となります。家族さえ気付いていない痴呆症状が発症していることや、主治医には内緒で他科に行ってきたくさんの薬を貰ってきたことなどをヘルパーから報告されることは1度や2度ではありませんでした。

これは他社の事例ですが、ある老人夫婦宅にヘルパーが派遣され、しばらくするとそのヘルパーの勧めで主治医が交替されたそうです。よく伺ってみるとそのヘルパー派遣事業者の経営母体が調剤薬局でそこと取引のある開業医がその主治医に替わったそうです。この事例の問題点は何でしょうか。ヘルパーが主治医の資質に口を挟むなどもってのほか？単に関連機関の医師に無理矢理替えさせられた？実は老夫婦が現在受けている医療についての不満・疑問点などをそのヘルパーに相談されたそうです。患者（利用者）側からしてみても日頃の「生活」を預けている人の意見も大切です。もしそのヘルパーの眼から見て在宅での医療対応について問題あり・誠意が無い様に写っていたなら、ケアマネージャーや事業所に相談して別の主治医を紹介することは利用者にとって良かれと判断されればあり得る話だと思います。ある意味、在宅の場において、医療は患者・家族のみならず介護者からも評価されているということだと痛感しました。介護事業者からすれば利用者に対しやる気のない医師は利用者さんの為にも替えてくれというのも理解できます。医師と患者の信頼関係という幻想にかいていた時代では無いと思っております。

現在の介護・医療の現場では、医師はピラミッドの頂点に位置するわけではありません。医師は、看護婦や薬剤師、PT・OT等の医療スタッフ及びケアマネージャーやヘルパー等の介護スタッフから成るチームの一員であり、全体をマネジメントする立場であるということを改めて認識させられております。無論、活動の目的は患者様（利用者）のADLとQOLの維持・拡大であるという共通の認識であります。

医療の後ろ盾の無い介護は利用者には選ばれる介護では決してありません。逆に、主治医が後ろ盾となっている介護ほど利用者にとってこれ程の安心は無いと思えます。医療として短期間であれば入院させてくれる病院はいくらでもありますが、患者様にとっては住み慣れた家というのは一つです。患者様が在宅での生活を望まれる限り、医療的なマネジメントは勿論のこと、主治医が軸となって介護をいかに組み込むかが、診療所レベルでの医療にとって、今後の重要な課題の一つではないでしょうか。

これからもご指導の程よろしくお願い申し上げます。

『整形外科と在宅医療』

医) 銀杏会 荒木整形外科

荒 木 良 守

(平成1年入局)

本院も開院して早、5年目を迎えることができました。開院前は何年か税務、経済、労務の勉強を独自にしましたが、現実には手ごわく、実際の開院では、資金繰りや労使関係、業者との取引など、かなり苦労した場面もありました。当初はテナント条件がよかったから、といってもビルの5階ではたして整形外科単科でやっていけるのかどうか不安で、出来ることは何でもやってやろうと思い在宅医療を始めました。幸い、順調に外来患者数も伸び、それに比例して在宅患者数も現在150人まで増え、パート内科医師3名、パート整形外科医師1名、パート皮膚科医師1名、在宅専用車7台、理学療法士2名、訪問栄養士1名、訪問看護婦5名、ケアマネージャー4名、ヘルパー5名の体制で在宅部はなんとかやりくりしています。

まず、開院前は在宅患者さんをどこから紹介してもらうのが問題でしたが、外来がある一定数以上になると自然にその1～2%ぐらいの患者さんは年々通院が困難になり、在宅医療を希望されるケースが多いです。外来患者数が増えれば整形外科の場合は自然に在宅患者さんが増えていきます。要は面倒がらずに『往診することもできますよ。』と声をかけてあげれば、言い出しにくかった患者さんも気が楽になってお願いしやすいようです。

点数の取り方には注意が必要です。御存知のように在宅につきものの在総診、24時間連携体制加算は一人の患者さんに内科Drと整形Drなど別々のクリニックから訪問診療をする場合、最初の在宅Drが在総診、24時間加算を算定すると第2のDrは算定できません。(往診は算定可能。)この点、複数のDrで協力して訪問診療するときには相互連絡して、取り決めにしっかりしておく必要があります。近隣の先生方とトラブルになることがあります。

外来と違って在宅ではチーム医療が大変重要です。一人医師の整形外科クリニックだけでも40～50人の患者さんを診ることができますが(それだけでも十分ですし、そこまでならなんとか一人でできますが相当しんどいですよ。)、在宅患者さんは様態の急変も多く、内科的診療も含めてトータルで診る姿勢がないと長く続けて在宅医療をしていくことは困難です。他科と組んでの連携や援護病院の確保、自院内の在宅用パート医師の確保が重要なポイントとなります。患者さんとしては、医者の科毎のテリトリーなど関係ありませんので、急性期から終末期まで全過程を一ヶ所で責任を持って看取って欲しいと思っています。また、トータルでサポートするには介護保険の知識が不可欠であり医者自身ケアマネージャーの資格が必要だと思います。(ケアマネ資格を持っていなくても在宅医療、介護事業はできますが。)しかし、このようなスタンスで本気で取り組むと、訪問看護、訪問リハビリ、訪問介護、デイケア、から果ては老人保健施設へとどんどん多角化が進んでしまい経営的な苦労が増大してしまいます。あまりに重装備にしてしまうと人件費、設備投資がかさみ有床病院経営と同じく利益が出なくなります。

今後の医療法改正によって在宅医療も聖域ではなくどんどん点数が削減されてくると思います。在総診、在医管のおかげでそこそこ潤っていた在宅点数も財源不足の折、2、3年後にははしごをはずされそうな勢いです。聞くところによれば、次回の改正で要介護度3以上の患者さんしか在総診を取れなくなるとか

ならないとか…。病状の比較的軽い患者さん中心の整形外科在宅にとっては厳しい情勢になりそうです。今後在宅医療に取り組む場合にはどの程度の投資まで、回収可能か判断が難しくなって来ています。

どこまで取り組むのかを常に考え、地域の連携をうまく利用して自分の役割をしっかりと見据えて事業計画を立てることが大事だと考えます。

整形外科在宅医療は大変しんどく時間的にも拘束されますが、それを担う開業医が少なくまだまだ需要が高い分野ですのでやる気のある先生方は是非取り組んで、地域医療に貢献してください。

最後に市整会も30周年を迎えたとの由、本会の歴史と重みを感じます。今後ともますます市整会の先生方のご活躍を心からお祈り申し上げます。



市整会の発展を願って

吉中整形外科

吉 中 正 好

(昭和36年入局)

大阪市立大学整形外科開業医会（市整会）創立30周年、本当におめでとうございます。

私が大学病院に勤務しておりました昭和47年頃、当時開業されていた先輩諸氏30名足らずで発足され、その後30年間に開院数が30名から180余名に達する大世帯に成長しました。この間初代会長伊藤成幸先生から5代目会長榎本高明先生までの諸先生方が頑張ってくられ今日に至っています。

さて、今回は特に榎本市整会々長より、どうすれば今後市整会が益々発展していくか、記念誌への寄稿の要請がありましたので、それについての私の考えを書かせて頂きます。

市整会々則に謳っていますように、会員相互の親睦、融和と団結であり、更に会員の知識の向上に尽きると思っています。

一番目の会員相互の親睦、融和ですが、会員数が180名と非常に多くなり、年長者と若い先生方との年齢差が40才は広がっています。この年齢差を埋める工夫が大切です。このためには、可能な限り出席しやすい会を開催し、互いに知り合うことの必要性を感じます。

新年会に始まり、秋の家族会までの数多く催されている市整会々合の充実、会員相互はもちろん、家族を含めた親睦が最も要求されていると思います。年配の先生方には、これまで積み重ねてこられた、種々の経験があり世の中を熟知されています。また、若い先生方には新しい整形外科的知識が豊かです。これを互いに利用しない手はないと考えています。「少年老い易く学成り難し」「一寸の光陰軽んずべからず」年齢差はあっても時間の流れの速度に違いのありようははずはなく、一時間は一時間、一年はあくまでも一年、この時間をどのように使っていくかが大事なのです。

市整会では、種々研究会、研修会が開催され、新しい知識が紹介されており、整形外科的知識は勿論一般教養分野の話も多く企画されております。医学に凝り固まった医師ではなく幅広い人間性豊かな医師として一般の人々に尊敬、感謝されるような人材が排出する会になってほしいと思います。

二番目に、医師会、日本臨床整形外科学会、日本整形外科学会で活躍されている先生方、社会保険、国民健康保険、労災保険、それぞれの審査委員として活動されている先生方も多くおられ、また医療過誤の相談をされている先生もおられます。これからは色々な情報を会の役員は収集し会員に知らせることが必要です。

三番目に、我々をそだててくれた教室に対する感謝の気持ちが大切だと思っています。我々開業医にとって育ててくれた教室は故郷であり、心のよりどころです。

これにともなって市整会の会員が多くなり会員同志の連帯がより強固になっていくと信じています。教室がさらなる発展をなし、多くの優秀な人材が次々と排出し、日本のTOP30は勿論、世界に冠たる存在になる事を同門会々員一同期待を持って見まわしましょう。

開業医にとって現在はまさに冬の時代です。昔から「冬来たりなば春遠からじ」と言いますように、悪いことばかりは続きません。この冬の時代に互いに助け合い、暖かい春が来ることを毎日希望を持って地域医療充実に向けて歩みましょう。

市整会の資金協力依頼に携わって

小松整形外科

小 松 堅 吾

(昭和37年入局)

市整会創立30周年記念誌に、会に関する内容の投稿依頼があった。市整会の重要なイベント、経緯などは他の方がお書きになると思い自分なりに考えた。

私が会務に携わってきた約20年、それも資金協力「いわゆるゼニ集め」について、この機会に多少まとめてみたいと思う。考えてみると、イベントに対する資金調達は誰かが担当しなければならない会務の一つではあるものの、なんとなく気の重い作業だった。特にその作業が2～3年にわたった場合もあり、時には、本来優先すべき診療業務より比重が大きくなり、職員や家内を煩わす事もしばしばだった。

いろいろな事情があったにしても、理事会、会員の大変なご理解とご協力のもと何とか務められた事を心から感謝している次第です。

市整会（前身の呼称：市大整形外科開業医会）の資金調達業務に手を染めるキッカケは市大整形外科教室開講40周年記念事業（1984・昭和59年）の手伝いをした事から始まった。伊藤会長、宮内、松井先輩などから、若手会員に対する募金協力の依頼は小松、長田の二人が分担するよう要請（命令？）があり、ノルマ達成のため約一ヶ月余り会員名簿を電話の前に広げ、会員にお願いを繰り返し、名簿氏名に○×を印したのを思い出す。それでも当時は先輩のお手伝い程度に考え、精神的には気楽なものだった。

昨今は市整会会員で病院経営者は「病院会」の方で教室の資金協力に対応しておられるが、当時は病院と診療所の区別なく「開業医会」として一つにまとまっていた。私は当時会計責任者でも無く、資料も見あたらず、詳細は思い出せない。70名足らずの会員で1300万円以上の募金協力があった様に覚えている。ただ4名の方々が各100万円の寄付をされた事が大きかったとの事であった。

その後、会計担当者となり残額の約500万円を引き継いだ。以後この種の会計と切っても切れない付き合いとなった。

昭和61年、開業医会会報・第2号に私の会費納入依頼文が掲載されている。当時、故林敏夫先生が豊中市医師会副会長に就任され、会計が急遽私にバトンタッチされた旨書かれている。ちなみに、当時の会費納入率は70%で、会計担当の希望として会費の納入依頼と会費納入により、「おらが会」への愛着と連帯感が生まれるのでは・・・と厚かましくも都合のよい事を書いております。

引き継ぎの際、林先生とのやり取りはこんな具合だったと覚えている。「会計と言っても、特別会計は別として、開業医会の会計は200万円程度でたいした事はない…仮に使い込んでも、君なら十分に弁償出来るよ」「ハア、そんな事で務まるのでしょうか」その後、会計は吉川先生にバトンタッチされたが、イベント、周年記念事業の度に大きな資金調達、募金協力の仕事からは解放されなかった。

簡単に携わったイベントと資金調達を列举すると下記の様になる。

1) 市大整形外科教室・開講40周年記念行事（1988）

* 年度途中で会計、募金協力作業を引き継ぎ、残金約500万円

2) 市整会創立20周年記念事業（1992）

* 予想外に出費多く、記念パーティーの増額と別途ご寄付を依頼、約750万円

3) 市大整形外科教室主催の「日本骨折治療学会」(1995)の協力

* 募金協力：約850万円(残金：約350万円)

4) 市大整形外科学教室開講50周年記念行事(含・第90回中部日本整災学会主催)

* 資金協力予定額：病院会会員を除き、診療所の会員だけで3,000万円

(日本骨折治療学会用資金の残金350万円を加算して合計3,000万円とする)

教室には1,700万円寄付し、現在1,250万円は小松が保管

5) 市大整形外科同窓会・奨学基金(数年、運営委員長を務める)

* 発足時・拠出金が少額の会員に増額の依頼。バブル崩壊のため最悪の金利収入となる。運営は極めて困難となり同門会会計に依存している状態。

バブル時、奨学基金の原資5,000万円を6%以上の高利に見せられ木津信用に預金していた事があった。銀行は倒産しない常識が完全に裏切られ、木津信は倒産した。当日はすっかり動転し、終日診療にならなかった。宮内先生(前運営委員長)と二人で基金の埋め合わせにつき、一旦は悲壮な覚悟を固めた。最悪の思い出だった。

◎なお、市大整形外科と市整会に直接の関係はないものの、昨年(2001)第14回JCOA学会(日本臨床整形外科医会・学会)を大阪臨床整形外科医会が主催し、大阪国際会議場で開催され盛会だった。会長が市整会会長の長田明先生でもあり、市整会を母体としている理事には、黒田晃司先生(現OCCA副会長)をはじめ格別の尽力を頂き、市整会の仲間の優秀さに感謝した次第です。話しを資金調達に戻そう。

私は(気が弱く、断り切れず)学会実行委員長を務める羽目になった。会場決定後の2年間、ビッシリと仕事が詰まっており、そのうえ学会運営上1,000万円程度の資金協力を製薬その他関係企業にお願いする事も重要な責務でもあった。折しも公正取引委員会と厚労省の厳しい通達があり、資金調達も思うに任せず、一方では市大50周年記念協力金の分割徴収分が式典と学会後も1年余り続いており、アレやコレやで大変だった。「甲斐性もないくせにムリをして…」と自己嫌悪に駆られる事もしばしばだった。

資金調達(協力募金)をお願いする度に、必ず問題になるのが寄付と市整会の存在意義であった。寄付金額が大きくなるほど不満も多くなり、無理からぬ事でもあった。不満の多くは、私に向け、TEL、FAXで届いた。ひとつ一つ列挙するのは割愛しよう。

吉中会長(現同門会会長)の時に、いろいろな意味をこめて若手会員と話し合う会「いわゆるガス抜きの会」(失礼!)を持つことになり呉家先生などの御尽力で40名近くが参集、種々の意見をたたかわせた事があった。大学・教室に対する不満、本会の存在意義とメリット・デメリット、大学に対するギブ&テイク論、資金協力の是非etc。ずいぶん長時間にわたった。

吉中会長の締め挨拶が印象に残っている。上手に大阪弁を使って本会の意義などに簡単にふれた後、次のような趣旨で若手会員に話された。どの大学でも程度の差はあれ同窓会、同門会、開業医の会は存在し、大学の教室との関係が保たれている。我々も自分が育ってきた教室の発展を願う気持ちは同じだと思う。ギブ&テイク、メリット・デメリットに余りこだわらず、純粋に教室の発展を願って応援しようと言う…そんな気持ちになって頂きたい。そのため、ある程度の資金協力というものは是非必要で、いわばこの種の会の「宿命」でもある。はっきりと宣言する様な話しぶりだった。その毅然たる態度表明は、平素ニコニコと穏やかな吉中先生からは想像できない程の厳しいものだった。

大阪臨床整形外科医会・理事の友人数名に大学の整形外科教室の資金協力について尋ねたところ皆大変な苦勞をしている事は同じだった。中には会員の診療所マップ・PR紙を作り一部10~5万円を買っても

らった例もあった。その方法では、集金額がしれているとの事ではあった。

会員に資金協力を依頼して、実際の徴収作業がスムーズに軌道にのり、終了するまでにはその煩雑さと時間のかかるのにウンザリする。その上当然の事乍ら、会員からも苦手とする電話が入る。内容は事務的な質問をはじめ、協力できない事情はもちろん、なかには主義・主張、人生観（哲学）など多岐にわたる。余談になるが、教室の40周年事業の際など後日国税局から電話があり「大学の40周年事業の内容、地区の税務署に多くの開業医から高額な寄付が経費として計上されている事についての説明」を求められた。診療など中断して2階に上がり長時間にわたり経費として認めて欲しい旨交渉した。後日聞き及んだ限りでは100万円、50万円など、一括の高額寄付は経費として認められていない様だった。その後いろいろな情報を収集・研究し、極力経費として認められやすくするため、一括納入の会員には数回分の領収書を発行してみたが結果はどうだったのか…自信はない。

参考までに市大整形外科教室の開講50周年事業・第90回整災学会のための資金協力の手順をお示ししよう。

まず、事務的処理の前に市整会理事会で「教室からの要望3000万円」について厳しい協議・検討がなされた。協力の是非、病院会の会員を除外して、診療所会員だけで調達するには高額すぎる事など。とりあえず会員のご協力を得て、努力しようとの結論に達した。しかし記念行事の日程をみて、時間的余裕は無く、早速作業に取りかかった。

* 山野教授の事業案内と挨拶状発送

* 吉中・同窓会理事長、長田・市整会会長連名の挨拶・依頼文

* 次いで事務的依頼内容（賛否、金額設定、徴収の方法等）の送付とFAX返信依頼

ある程度の回答を頂くまで3回、1～2ヶ月必要

* 集金業務の業者委託の是非につき3回交渉（同時進行）

委託件数、手数料（36ヶ月その他で200万円と言う）その他で契約成立せず

* 大阪府医師信用組合に府下会員分のみ自動徴収依頼

募金協力会員へ「医師信用の自動引き依頼書」送付、押印依頼と回収

この作業は完了まで1ヶ月以上必要（電話催促必要）

* 他府県会員には直接、3年間（半年毎で計6回分）請求書を送付する事で協力依頼

* 一括納入会員（30余名）へは数回依頼状発送

* 医師信の自動徴収は36ヶ月におよび、その後特別会計の収支決算（2000年）

収支の詳細は総会に報告し、市整会会報に報告済み。

50周年記念事業と中部整災学会関係では、本会から教室への寄付は1,700万円而现在1,250万円を内部留保している。一時、残金金額を教室に寄付して欲しいとの話もあったが、市整会理事会では「教室が是非必要な時」に応援する事に決定したと聞く。

振り返って見ると約16年間、市整会と関連事業で随分多くの会員に、御無理なお願いを続けて来たように思う。医療が厳しい情勢に置かれている時代にもかかわらず、御理解と快く資金協力に応じて下さった方々に心から感謝し、御礼申し上げます。有難うございました。

市整会に望むこと

黒田整形外科クリニック

黒 田 晃 司

(昭和46年入局)

20年余り前、昭和55年の5月に私が堺の北のはずれで開業したとき、市整会（当時は開業医の会といっていました）は結成されて8年目でした。おさそいを受けて、入会させていただいたときは、もちろん一番のかけ出しで、右を向いても左を向いても全部先輩ばかりでした。記録によりますと68名の会員がおられたそうですが、私の記憶では会合に来られていたメンバーはだいたい20名くらいでした。講演会の講師は今にして思えば著名先生が多く、山田法胤執事、村松剛教授、日高正法氏などで、どのくらいの講演料を少ないメンバーで負担していたのか、今では考えられないような会費を支払っていた先生がおられたのでしょう。

その後、南平先生、杉本先生が開業、入会されまして心強い同級生会員ができるとともに、ぼつぼつと私より若い年代の先生方が開業されてきましたが、10年間ほどは末席にくっついていった時代があったと記憶しております。

当日は、メンバーが少なくて会合は豆ごはんの「廣田屋」（阿倍野）や茶臼山の「阪口楼」——ここへ行くときはドキドキしながらホテル街をぬけて行きました。——宗右衛門町の「新市」が多かったと記憶しています。

昭和63年（1988年）になって懇親会の世話をしておられました上田先生の助手を務めさせていただくようになりました。

それまでは、秋に会員の懇親会として一泊旅行をしておりましたが、しだいに参加者が少なくなったため家族会を開催することになりました。その第1回目は、神戸の北野の異人館とチャイナタウンをめぐるバスツアーとしました。バス代が高いため、観光バスではなく、千里山バスの中型車をチャーターいたしました。昼食はチャイナタウンの郡愛飯店の中華料理を楽しみに出かけました。休日の昼どきでしたがオーナーが田村先生（堺医師会）の同級生ということで二階を貸し切りにしていただきました。中国人コックさんの作る料理に舌鼓を打ちました。この頃から、市整会が私の開業人生の中で占める位置が大きくなるとともに、私自身が市整会員の一人に加えてもらった喜びに浸れるようになったと記憶しております。このあとしばらく市整会の年間行事の中で、家族会という新しいスタイルに力を注ぎました。八日市の招福楼、花の万博会場、暫での落語会、そこから、市整会創立20周年パーティーへと続いてゆきました。この20周年記念行事については、前に書かせていただきましたので、ここでは省略いたしますが、この記念行事の推進の過程で、市整会の一人一人の会員さんの皆さんの存在を私に教えてくれました。

私達は、色々な社会（？）と関係を持って過ごしていますが、身近のある同門会、臨床整形外科医会などの関係は市整会の一員として、かかわっていることに気がきました。同門会との関係は第3代の市整会会長を務められました吉中先生が会長を務めるとともに勤務医、開業医から成っています。その開業医の会が市整会です。

また、同会の奨学基金の運営について、当初から苦勞されてます宮内先生、小松先生——今日その功勞が高く評価されて感謝状が送られました——も市整会代表として同門会と一緒に運営に当たられたと思い

ます。

OCOIAとの関係については伊藤先生、長田先生が会長を務められ、第14回のJCOA学会大阪では小松先生が実行委員長として推進されたことはご存知の通りです。

そのときに懇親会を担当しました私は参加者が集まらず榎本先生に泣き付きましたところ、市整会の皆さんに全面的にバックアップしていただきましたことは忘れられません。

それからこのことを考え合わせると市整会は我々が対外的に活動するときの母体になっていることはまちがいありません。

同門会については大阪市大の整形外科教室で若い日に、その腕をみがき諸先輩に厳しく(?)きたえてもらった日々を過ごした者の集まりとして、大学の教室にべったりではなく、その組織をしっかり確立して、新しい教室(教授)に同門会としての意見を主張できる体制・役割分担する組織を作っていた方がいいと思います。

また、OCOIAは長田先生が、平成12年～14年に会長を務められましたので、一般に10年後に次の会長が回ってくる予定です。そのためにその年代のメンバーに照準を合わせて、人材を育てておくことを忘れてはなりません。

また、兵庫県、奈良県、和歌山県、滋賀県にもメンバーがちらばっていますので、各県のメンバーとの連携も必要です。

各地区の医師会には、多数の先生が理事や会長になって活躍しておられます。このことは大変心強いことです。

セクトとしての市整会を強調する必要はないのですが、多数の優秀な人脈は財産です。これらは大いに活用されるべきだと思います。同門会・市整会は各年代が続いており、次の若い世代へと続いてゆく組織でなければなりません。市整会の皆さん、益々意気軒昂に活躍してください。



市整会創立30周年記念パーティー

西沢整形外科クリニック

西 沢 徹

(昭和62年入局)

平成14年11月17日、市整会設立30周年記念パーティーが開催されましたので、ご報告いたします。

外套も不要なほど暖かく爽やかな秋晴れの下、中之島のプロムナードを会場の全日空ホテルへ向かう。万葉の間の前では、既に担当の理事の先生方が受付で勢ぞろいだ。お互い照れたように挨拶。榎本高明会長、黒田晃司先生は会場内をまわり、色々と指示されている。

続々と皆様ご来場。総勢128名という大祝宴である。

定刻5時。タキシード姿もきまった黒田先生の司会でオープニング。中央壇上にあがられた南平克積先生が厳かに開会を宣言される。

まず榎本会長の挨拶。市整会歴代会長への謝辞、活動状況の報告、医局との連携の必要性などを述べられる。「頼り甲斐のある市整会を目指す」の言葉は、会員の心を大いに強くするものであった。

続いて、第3代会長の吉中正好先生、第4代長田明先生、また市整会の経済基盤を整え、親睦の会としては稀有な骨太の会に成長させてくださった宮内貴、小松堅吾両先生の4名に榎本会長より感謝状と花束が贈呈される。

教室からも、高岡邦夫教授ご夫妻、小池達也助教授ご夫妻、格谷義徳助教授のご臨席を賜り、黒田先生から紹介が行われた。

引き続き、高岡教授よりご祝辞をちょうだいする。学会では、会場が凍りつくような鋭く厳しい質問をよくされるので、どんなスピーチが飛び出すやらとやや緊張して拝聴したが、学会講演と同じくきわめて歯切れよい口調で、医局並びに医局員への期待と抱負を述べられた。また大学からの市整会への人的支援を「当然の事」ときっぱり断言されたときは、会員一同胸落ちし爽やかな風が会場を流れた。

シャンパンが注がれ、渡辺径宏副会長のご発声で乾杯。宴が始まる。料理はおそらく、あらかじめ吟味されたのでしょう。正統フランス料理が供される。

宴たけなわ、感謝状を授与された各先生方へのインタビューがあった。黎明期のご苦労話や、低金利時代における会の財政運営のあり方、同門会との関係をどうするかなど長年市整会を育ててこられた方だけが持ちうる、暖かいご意見であった。

O C O A会長を退任されたあとも、J C O Aの重鎮として月2回東京へ会議に出てられるという長田先生からは、私見と断られながらも「理学療法3以下が廃止されるかも」、とのご発言があった。ある程度の覚悟をしていたとはいえ、一瞬静寂が会場を支配した。

お酒も身体をめぐり心地よくなったところ、アトラクションが始まった。

最初は野上倫昭先生自身によるギターの弾き語りだ。力強く透明な歌声がすばらしかった。先生のオリジナルの歌「A little ever friend」を聴きつつ娘のことを考えていたら、落涙しそうになる。どうも4月以降気弱になっているのかな。

「市整会の詩」なんかあってもいいなと思った。

続いて、渡辺先生の紹介で津軽三味線。三味線といえば、「かしまし娘」しか思い浮かばない私なぞが蘊蓄たれるのも憚られるが、三味線の発する音の深さと拡がり、会場全体を包み込んだ。圧倒されたのは私のみではあるまい。アンコールの拍手が決してお義理でないのは、掌の汗が証明している。久保比呂誌氏の演奏は、その存在自体が芸術といえるほどであった。

トリはジャズバンドだ。頼先生のご紹介である。先日の文化講演といい、諸先輩の文化、芸術に対する造詣の深さというか、精神の余裕というか、いつも我が身を顧みるのである。でるはため息のみ。

市整会がこれほどの隆盛を誇るのも、先生方の人間としての奥行きによるところが大なりといつも思うのだ。香りといってよいかもしれない。私自身、広報担当となってからというもの、味わうほどに市整会が好きになっていく。

さて高橋俊男トリオとヴォーカルの宮野英子さんによるライブは、津軽三味線からバトンタッチしても何の違和感もなく、私でも知っているスタンダードなナンバーを交えて、軽妙にかつ繊細に魅せてくれた。ジャズの魅力はやはりアンサンブルなのかもしれない。

噂された三味線とのジョイントセッションがなかったのは少し残念だったが、祝宴にふさわしい演目の数々であった。少し上気したような、微笑を浮かべたお顔が多かったように感じた。

あっという間の3時間であった。終了時刻となり、前野岳敏副会長により閉会の辞が宣せられる。名残惜しく皆会場をでたものの、歓談の輪は容易には解けない。しかし明日からの診療を考えるとのんびりもしてられない。後ろ髪ひかれる思いで、戦場に赴く戦士の如く、三々五々家路についた。

あらためて市整会の懐の深さを、この宴で実感した。

堂島川に沿って流れる風が、ことのほか心地よい夜であった。



市整会30周年記念祝賀会 進行表

平成14年11月17日 全日空ホテル 『万葉西中の間』

16:30 受付開始

17:00 記念式典（司会 黒田晃司先生）

開会宣言 市整会副会長 南平克積先生

会長挨拶 市整会会長 榎本高明先生

功労会員表彰 吉中正好、長田 明、宮内 貴、小松堅吾 各先生方に感謝状と花束の贈呈

来賓の紹介 大阪市大大学院医学研究科

整形外科学教授 高岡邦夫先生 御夫妻

大阪市大大学院医学研究科

リウマチ外科学助教授 小池達也先生 御夫妻

大阪市大大学院医学研究科

整形外科学助教授 格谷義徳先生

来賓挨拶 高岡邦夫先生

17:30 記念祝宴

乾杯の御発声 市整会副会長 渡辺径宏先生

功労会員からのお言葉 吉中正好先生

長田 明先生

宮内 貴先生

小松堅吾先生

18:10 記念音楽会

ギター 野上倫昭先生

三味線 久保比呂誌氏（紹介 渡辺径宏先生）

ジャズバンド 高橋俊男トリオ ヴォーカル 宮野英子氏（紹介 頼 功先生）

20:00 閉会の辞 市整会副会長 前野岳敏先生

市整会 30 周年 御席

2002年11月17日(日)
17:00～ 万葉西中の間

M E N U

Hors-d'Oeuvre Variés
オードヴル6種盛

- Salade de Crabe à la Coulis de Tomato
タラバ蟹のサラダ仕立てトマトのクーリー添え
- Rouelle de Saumon Cru Mariné en Tartare au Caviar
サーモンとホタテ貝のタルタル仕立てキャビア添え
- Mousse de Homards en Gelée
オマール海老のムースジェリー仕立て
- Mille-Feuille Gourmand en Terrine
フォアグラのテリーヌ、ミルフィユ仕立て
- Jambon Cru au Melon
生ハムの赤肉メロン添え
- Salade de Haricots Verts
サヤインゲンのサラダ仕立て

Foie Gras Sauté aux Navets
フォアグラのソテー大根添えソースペリグー

Soupe de Fruits de Mer en Croûte
海の幸のスープ、パイ包み焼き

Rouget Poêlée au Risotto Safrané
イトヨリの香草風味サフランのリゾット添え

Sorbet
お口直しのシャーベット

Mignon de Bœuf à la Japonaise
牛フィレ肉のステーキ、和風仕立て

Tarte Pomme Glace à la Vanille
りんごのタルト、バニラアイスクリーム添え

Café
コーヒー

Pain
パン

ANA HOTEL OSAKA

祝 市整会創立30周年



<実行委員長> 南平副会長



受付担当の先生方



<乾杯> 渡辺副会長



<司会> 黒田先生



<祝辞> 高岡邦夫教授



<閉会挨拶> 前野副会長



<開会挨拶> 榎本会長



<感謝状授与> 長田先生と吉中先生



小松先生と宮内先生



＜ゲスト＞高岡邦夫教授 御夫妻



＜ゲスト＞小池達也助教授 御夫妻



＜ゲスト＞格谷義徳助教授 前野先生御夫妻



伊藤先生 御夫妻



木下先生 御夫妻



有馬先生 御夫妻



松尾先生 御夫妻



木股先生 御夫妻



和田先生 御夫妻



妻鹿先生 御夫妻



石上先生 御夫妻



吉中先生 御夫妻



吉田正和先生

松井先生



吉田洋先生



反田先生



宮内先生 御夫妻



上田先生 石崎先生



小松先生 御夫妻



合志先生 江口先生



長田先生 御夫妻



柿本先生 門林先生 吉川先生



三明先生



木全先生



榎本先生 御夫妻



中野先生 御夫妻



明石先生 御夫妻



門田先生 中村英健先生



奥田先生 御夫妻



畠中先生 御夫妻



渡辺先生



杉本先生 御夫妻



片上先生



越宗先生 御夫妻



南平先生 御夫妻



黒田先生 御一家



楠先生 御夫妻



頼先生 御夫妻



戸田先生 御夫妻



吉田研二郎先生 ご夫妻



阪本邦雄先生 御夫妻



鳴嶋先生

林先生



西上先生

久保先生



和田先生 御夫妻



山中先生 御夫妻



増田宗義先生 御夫妻



中村薫先生 御夫妻



坂部先生



茶之木先生



斧出先生 御夫妻



中岡先生 御夫妻



成田先生



黒澤先生



秋野先生 御一家



増田博先生 御夫妻



天野先生 御夫妻



野上先生 御夫妻



寺川先生 御夫妻



馬野先生 御夫妻



高山先生 御夫妻



西澤先生

安井先生



古瀬先生 御夫妻



豊川先生 御一家



荒木先生 御夫妻



<ギター>野上先生



<三味線>久保比呂誌氏



<ジャズバンド>高橋敏男トリオと宮野英子氏





宮内先生



吉中先生



小松先生



長田先生



市整会30周年記念事業準備委員会

市整会副会長

南 平 克 積

平成14年3月9日の市整会役員会におきまして市整会創立30周年記念事業準備委員に榎本（会長）、渡辺：前野：南平（副会長）、吉川（会計）、黒田：阪本（邦）（総務）、楯：秋野：天野（厚生）、頼（学術）、増田（博）（広報）の12名の先生方が選任されました。

30周年記念事業として1998－2002年のまとめとして市整会誌特別号を発刊し、多人数化した全会員の総結集の機会として記念パーティーを開く。ということを主旨として計4回の準備委員会を開催しました。

市整会誌特別号は前野先生、増田（博）先生を核として編集委員として西沢 徹先生、寺川文彦先生、豊川英樹先生に加わっていただき、診療終了後何回も編集会議をもっていただき完成していただきました。黒田先生には記念パーティーの写真の編集に大変骨を折っていただきました。多くの先生方にお忙しい中投稿していただき、内容豊かな、立派な記念に残る特別号にいただきました。

30周年記念パーティーは11月17日（日）全日空ホテル大阪にて会員・家族123名という多くの出席を得て、大学より高岡教授ご夫妻、小池助教授ご夫妻、格谷助教授のご出席も得て盛大に楽しく、和やかでおしゃれな会としていただきました。黒田先生の司会で榎本会長の挨拶、高岡教授の祝辞に続き、第3代会長吉中先生・第4代会長長田先生へ感謝状の贈呈、宮内先生へは奨学基金・小松先生には市整会の経済的基盤の形成に大きく貢献していただいたことに榎本会長より感謝状が贈られました。フランス料理のフルコース、屋台の焼ふぐ・すし・そばなどに舌鼓をうち、アトラクションとして会員から野上先生のプロ顔負けの自作のギターと唄、渡辺先生ご紹介の津軽三味線の演奏、頼先生ご紹介のジャズバンドの演奏と歌が楽しく、迫力をもって、また、軽快にと続けられました。座も賑やかに親子以上に年齢差のある会員同士の語らいや教室からの高岡、小池、格谷先生との交流で時間の過ぎるのがあっと言う間でした。

楽屋裏では会計の吉川先生にはうるさい金銭の収集・支払い・管理に、渡辺先生には会場のホテルとの交渉など多くの時間をさいていただきました。

公私共にお忙しい会員の先生・ご家族の皆様のなみなみならぬ熱意のお陰でとくに、準備委員会の先生方の献身のお陰で、30周年記念事業が力強い団結力と未来への希望を印象づけて終了できました。心より感謝申し上げます。

開業医は大海に彷徨う粗朶（そだ）に例えることが出来ます。海流や雨風、時に暴風雨に晒され、漂流しているようなものです。

手を繋ぎあって結集していければ、筏になってけっして沈んでしまうことはないと思います。

今後ますます市整会が会員のための会として充実・発展してゆく事を祈ります。

編集後記

伝統あるわが市整会も30周年記念祝賀会を、平成14年11月17日、全日空ホテルにて盛大にとり行う事ができました。会員の先生方及び御家族の皆様の御協力と、榎本高明会長を始め役員の先生形の並々ならぬ御尽力により、参加した皆様に大いなる感動を与えることができた立派な祝賀会になりました。医局からは高岡邦夫教授御夫妻、小池達也助教授御夫妻、格谷義徳助教授の御臨席をいただき、医局と市整会との連がりも一層親密になって行くことが予感されました。

この度は、市整会広報・29号の30周年記念特別号として、この祝賀会に関する記事・写真と25周年記念祝賀会以後の過去5年間の市整会の活動・行事等のあゆみ、高岡教授の御祝辞、会員の先生形の投稿をお願いして、編集致しました。投稿は祝賀会参加者と同様に大先輩の先生方から30才代の若い先生方に及ぶ幅広い層にわたっています。日常生活のエピソードや、趣味、旅の思い出、開業苦労話、新しい医療への取り組み、市整会充実期の苦労話や市整会へ希望する事等々、会員の先生方の日頃思っている事が集積されていて、格調の高い有意義な特別号ができあがりました。会員の先生方の御協力に改めて感謝致します。

広報担当 豊川英樹 西沢 徹
寺川文彦 増田 博
前野岳敏（後記）